

<特集記事>

指文字の浸透

蘭学・洋学における西洋指文字の受容

木下 知威

日本社会事業大学

mail@tmtkknst.com

1. 目的と方法

江戸幕府における外交政策のはじまりは、豊臣政権による朝鮮出兵で関係が悪化していた朝鮮と明との関係を安定させることにあった。近世における外交概念としての「鎖国」は1801（享和元）年にケンペル "The History of Japan"（1727）にある付録を長崎で蘭書翻訳を行っていた志筑忠雄が『鎖国論』として訳出したことによる¹。これが鎖国の概念として成立するものであって、近代から戦後における「鎖国」の受容について明らかにされている。これによって、日本を海外から完全にシャットアウトされるイメージをもつ「鎖国」の概念があるが、最近はこの概念の再検討がされている²。近世史における解釈では、1639（寛永16）年にポルトガルとの交易を停止して以降、外交の窓口として四つの口 — 長崎、対馬、薩摩、松前を窓口としてオランダ、中国、琉球、蝦夷と貿易関係を保っていたということになる。

このうち、オランダとの交流は1609（慶長14）年に、連合オランダ東インド会社が幕府に交易を求めたことをはじまりとする。それはやがて、第8代将軍・徳川吉宗（1684-1751）の「享保の改革」において、農業・科学技術の向上といった殖産興業を推進する目的で蘭書の輸入を一部緩和し、青木昆陽（1698-1769）がオランダ語を学び始める。このように、国内において主要な外国語をポルトガル語からオランダ語に転じつつ西洋文化の包摂が積極的に行われるようになった。1854（嘉永7）年にアメリカと和親条約の締結したことをはじめとし、諸国と条約を結ぶことで開国の契機となり、西洋の知識が日本に加速的に導入されていったことは広く知られている。

このことは、視覚・聴覚障害教育の歴史においても主要なトピックであった。この相関を明らかにしたのは、中野善達・加藤康昭『わが国特殊教育の成立』（東峰書房、1967年初版、1991年改訂新版）である。この研究においては、幕末日本における視覚障害・聴覚障害教育の方法、身体障害者の生理的特徴といった教育の可能性を指摘している。具体的には、蘭学者・大槻玄沢らが海外情報についての見聞を書

物として取りまとめたこと、箕作省吾（1821-1846）による世界地理書『坤輿図識』（こんよずしき、1845）をはじめとする地理書の出版があった。このなかに海外の障害児教育にかんする言及がとみとめられること、中国から輸入された医学書に視覚障害・聴覚障害について記載されていることを論証している。中野と加藤がいうように、日本において漢書・蘭書の輸入と学習による理解の促進は重要なトピックとして視覚・聴覚障害教育の歴史研究においてしばしば言及されている。しかし、中野・加藤の研究から半世紀が経過した現在、日本史と視覚障害・聴覚障害教育の連関が十分に研究されてきたかという点に首肯することはできない。

例えば、このトピックにおいて念頭におくべきなのは、幕府が国内・海外における知識の広まりについて主なメディアとなる書籍を「禁書」として規制していたことである。これは教化の名目でなされたものであり、国内外の知識について制限をくわえていたのだから、近世におけるリテラシーは士族から農民までのあらゆる層に確保されているものではない。知識は日本全体をリキッドに流れるものではなく、知識層において占有されてきたものであった。この知識の格差という前提は、海外における聴覚障害教育に関する知識が日本に流布していく様子はどのように素描するのかという課題が浮上することになろう。それは単に、漢書や蘭書によって学者たちが理解を進めていくといった机上での所作に終始する受動的なありようではなく、むしろそれを受けて能動的にどういう身振りをしたのかという問いでもある。

また、手話の歴史において考えると、中野・加藤はマカオや上海に派遣された宣教医であるベンジャミン・ホブソン（合信、1816-1873）の『全体新論』（1851）の六章「手鼻口官論」に着目している。「手鼻口官論」に手を使った意思疎通についての記述があることを指摘し、1860年（万延元年）の遣米使節においてアメリカに派遣された日本人たちが見学という名目で聾者や聴覚障害教育の現場に接するというプロセスを論じている。つまり、手話の歴史では書物における聴覚障害教育の言及から、海外における日本人による教育現場の実見という系譜で理解されている。しかし、書物の理解と実見のあいだにはどのような連続性があっただろうか。あるいは、分断されていたのだろうか。近世における外国語学習としての蘭学・洋学において手話・指文字に関する情報はまったく知られてこなかったのだろうか。この問いに中野・加藤は答えていない。ひいていえば、蘭学・洋学史においてこれらの問題はどのように探究されてきたのかという問いでもある。

これらの問いに応答するために、本論において「幕末から明治初期における日本人の指文字に対する認識」というテーマを設定したうえで史料の検討と分析を行い、手話と日本史研究をより重層化させる。江戸幕府の外交政策をもとにどのようなメディアが日本にもたされ、それはどう扱われたかということを日本の社会における聾啞者の実態に即しつつ、時系列に沿って明らかにしたい。具体的には、享保の改革から明治の蘭学・洋学における言説を史料とともに読解する。

なお、本論における用語についていくつか述べておく。まず、「蘭学」「洋学」の語句については、オランダとの交易から開国に伴う西洋諸国との交易の拡張に伴って、蘭学から洋学に語句が変化していくという意として使い分けている。

また、「聾者」「啞者」については、近世・近代において「聾者」は耳が聞こえないもので、「啞者」は口がきけないという意として、発音ができないものを指すことがあった。本論では原文から引用する場合はそのままとした。啞の表記は「啞」と「啞」があるが、編集方針に則って「啞」に統一している。ただし『手話学研究』の読者層を鑑みて、現代語としての「聾」と表記したことがある。

最後に、西洋指文字は片手と両手であらわすものがある。本論では主に片手であらわす指文字を「片手式指文字」、主に両手であらわす指文字を「両手式指文字」と表記した。

2. 蘭学

2. 1. Nederlandsch Magazijn の将来

18 世紀の蘭書輸入の歴史を概観すると、享保の改革によって外国書の輸入が緩和され、田沼意次の時代にはオランダ趣味が盛んになったという背景がある。それは蘭学に強い関心を持つ藩主 — 蘭癖（らんぺき）大名・朽木昌綱（丹波福知山藩主、1750-1802）が長崎商館長のティチングと交渉し、蘭書を入手することもあった。また、1630（寛永 7）年をはじめとする一連の「禁書令」は庶民に対する道德規範のコントロールを目的とするものであり、これによってキリシタン書、徳川家に関する書籍、好色本などの流通に強い制限が加えられていた。ようするに、書物というメディアを介した情報流通は規制されつつも、階級制度の上層においては特定の書物がコレクションとして入手することができた。このような 18 世紀を経て 19 世紀に入るとより蘭書の注文が多様化してくる背景がある。

その中で、ある書物がオランダから将来（輸入）された。この雑誌の名を "Nederlandsch Magazijn ter verspreiding van algemeene en nuttige kundigheden" という。洋学史では Nederlandsch Magazijn（以下、NM）と表記される。まず表紙と片手・両手式指文字の図が掲載されている箇所を示す（図 1～4）。

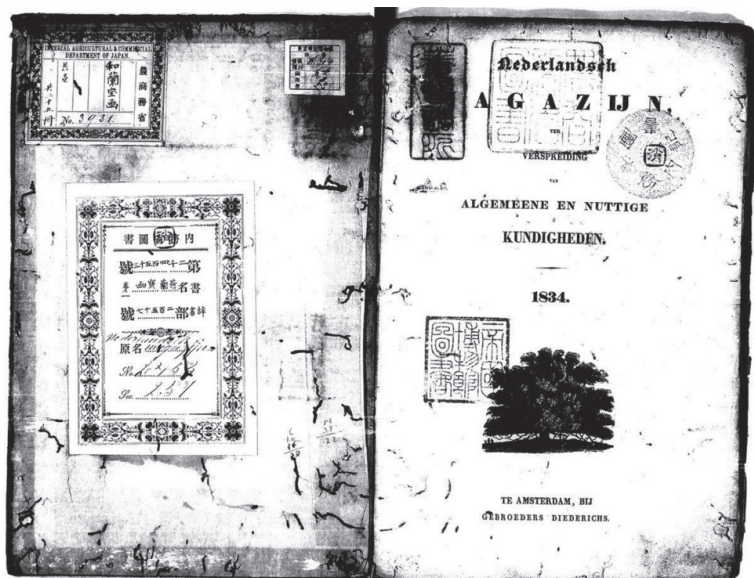


図1 "Nederlandsch Magazijn"
(1834年刊、東京国立博物館資料館蔵)

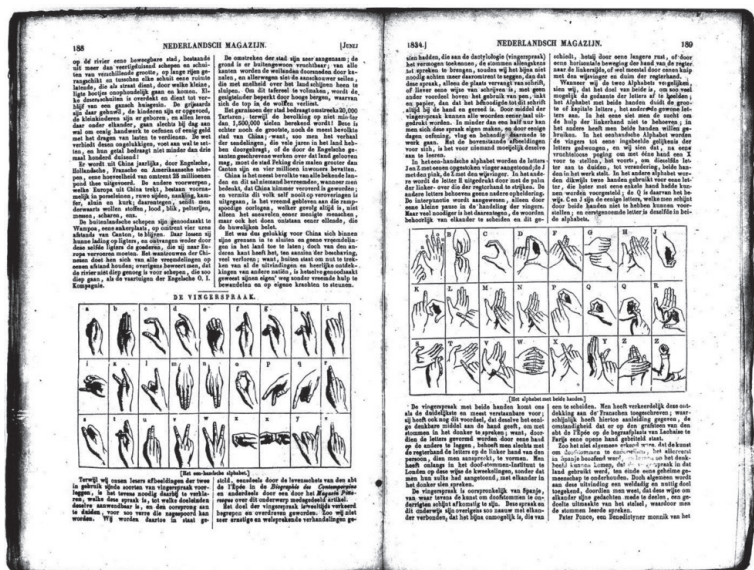


図2 指文字に関する記事
(部分、"Nederlandsch Magazijn", 1834年6月:p188-189.)

指文字の浸透

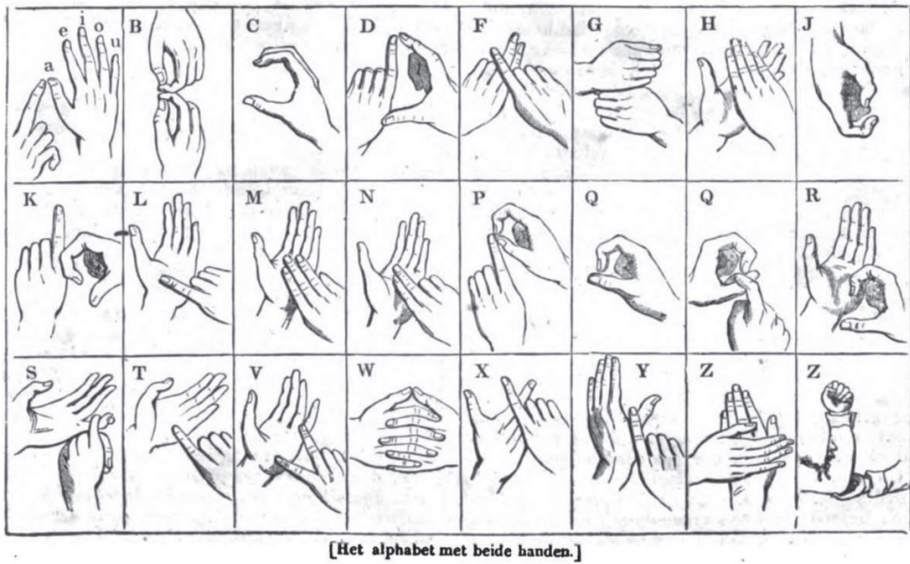


図3 片手式指文字図 (拡大)

("Nederlandsch Magazijn", 1834年6月: p188. 実寸: 縦 88mm、横 148mm)



図4 両手式指文字図 (拡大)

("Nederlandsch Magazijn", 1834年6月: p189. 実寸: 縦 89mm、横 151mm)

NM は 1834 年から 1845 年、アムステルダムで刊行されていた大衆啓蒙雑誌である。それ以降は表題が冒頭に掲載されるのみで月の表示が消えるため、月刊・年刊の区別は曖昧である。1846～1858 年までは "Nieuw Nederlandsch magazijn"、1859 年からは "Nederlandsch Magazijn. Nieuwe Serie" と名称が二度にわたって変更されている。そのうち、1885 年に廃刊となっているので、ほぼ半世紀続いた雑誌ということになろう。1834 年と 1835 年は月ごとに表題と出版月が冒頭に掲載されていることより、月刊誌であることがわかる。

内容は動・植物、鉱物、天文学、物理、工業といった科学技術の情報と豊富なイラストをのせるものであった。頁数は号によって異なるが、おおよそ 32 頁前後で構成されている。大きさは縦 300mm、横 200mm である。

幕末において、NM は少なくとも 2 点があった。東京国立博物館資料館（以下、東博本）と、宮内庁書陵部図書寮文庫（以下、宮内庁本）が所蔵する。東博本は年ごとにまとめて合冊されており、薄橙色の外装に「荷蘭寶函 一」「一八百三十四年」と墨書きされている。図 1 にあるように、表紙裏と内表紙には「農商務省」「内務省」「東京帝室博物館」の 3 点の蔵書票、「蕃書調所(ばんしょしらべしょ)」「農商務省図書」「内務省図書記(消印)」「帝国博物館図書」の 4 点の蔵書印がある。これらのなかで一番古いのが「蕃書調所」の蔵書印である。蕃書調所は 1856 (安政 3) 年に天文方の蛮書和解御用という、西洋暦学を専門とする部門を継ぐかたちで開かれたところで、主な業務として語学学習、翻訳業務を行っていた部門である³。先の印記からは蕃書調所があった 1856-1862 年のあいだに将来された NM であり、内務省、農商務省の印影があることより明治には新政府の所蔵になるという経緯を辿っている。

宮内庁本の NM も年ごとにまとめて合冊されたものである。印記については、1834-1845 年は「宮内省図書印」のみ、1846-1856 年は「宮内省図書印」と「長崎東衛官許」の 2 つの印がある。「宮内省図書印」の「宮内省」は戦後に消滅するため、戦前までに受け入れられたことを示す。「長崎東衛官許」は、長崎奉行所立山役所による輸入検印であること、もしくは 1858 年 (安政五年) 10 月に長崎屋源右衛門が江戸で販売する蘭書の内容を検めて押す印であるという二つの説が洋学史で提唱されている。しかし、NM は雑誌であるうえ、日本において禁教であったキリスト教に関する記事もふくまれていることから、市井に流通した可能性はほとんどないと考えられるべきであろう。よって、幕府の管理下に収蔵されていたものであると考えるのが妥当であろう⁴。これら東博本と宮内庁本 (1846-1856) は、いずれも明治以前に将来されたものである。図書寮の NM の特徴として、各記事に漢訳された表題が付箋として貼り付けられていることが挙げられるが、これについては後述する。

さて、NM の 1834 年 6 月号に掲載された記事のひとつ "DE VINGERSPRAAK" に片手・両手式指文字が掲載されている (図 3、図 4)。片手式指文字は X の表現のみ、両手で示すものもあり、両手式指文字は Q の表現が 2 種類あることを付言しておく。

これは NM によるオリジナルの記事ではなく、ロンドンで刊行されていた雑誌 "The Penny Magazine of the society for the Diffusion of Useful Knowledge" (以下、"Penny Magazine") の 1833 年 12 月号に掲載された指文字の記事 "Manual alphabets" をオランダ語訳したものである⁵。Penny Magazine はチャールズ・ナイトによって創刊された雑誌で、大衆にたいする啓蒙を目的にするものだった⁶。この雑誌が成功を収めたために、イングランドからヨーロッパに飛び火する形でドイツの "Das Pfennig-Magazin"、フランスの "La Magasin Pittoresque"、スペインの "Semanario Pintoresco Español" が出版されるようになった。NM もまた然りである。NM の指文字の記事に "Penny Magazine" の記事が流用されているのは協定に基づくものであり、パリ、ロンドン、アムステルダムにおける雑誌のあいだを片手式・両手式の指文字が流通する要因となったのである⁷。

次に、ヨーロッパにおける指文字に視点を向けてみたい。よく知られているように、ヨーロッパの指文字には二つの系統がある。ひとつはコスマス・ロッセリウス、フアン・パブロ・ボネットらイタリアとスペインを発祥とする片手式指文字、もう一方がイングランドのジョン・ウォリスを発祥とする両手式指文字である⁸。ポンセ・レオンからパリで聾学校を開いたド・レペを中心にその系譜を要約しているのが NM の記事 "DE VINGERSPRAAK" の要点であった。この記事が主な典拠とするのは、パリで刊行された人物伝記集 "Biographie nouvelle des contemporains" におけるド・レペの詳細な項目と、パリで刊行されたフランス語の年刊誌 "Le Magasin Pittoresque" (1833 年) に掲載された記事 "Alphabet manuel des Sourds-Muets" (聾啞者のアルファベット手引) である⁹。この記事にも片手式指文字の図が掲載されている (図 5)。

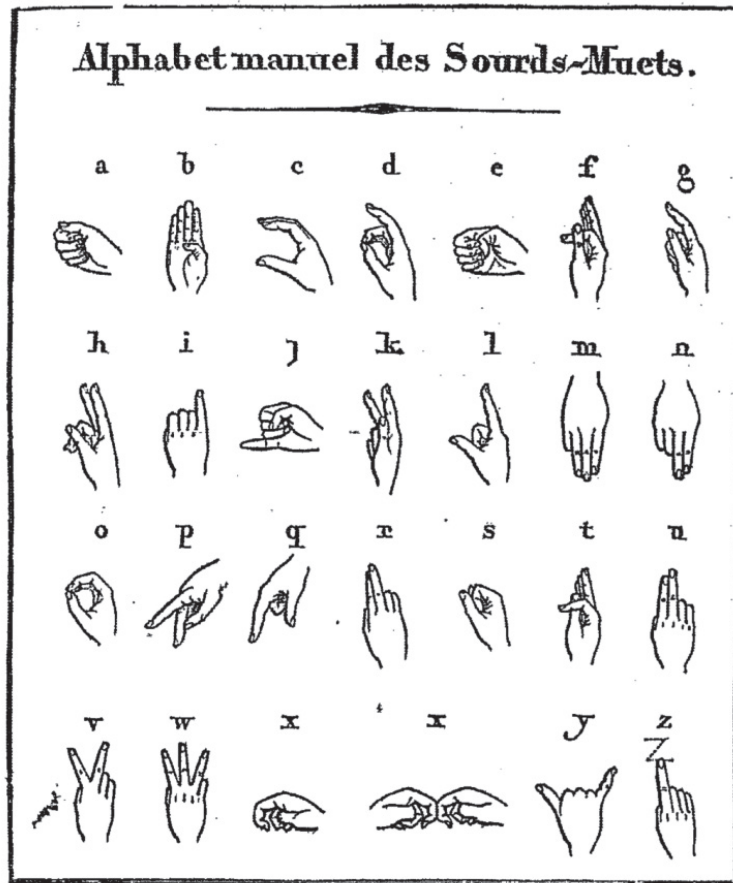


図5 "Le Magasin Pittoresque" (1833) における片手指文字図

"Penny Magazine" の本文中の説明からも掲載された片手式指文字は "Le Magasin Pittoresque" と各アルファベットの手の向きや形が共通していることから、"Le Magasin Pittoresque" に典拠して図を作成しているとみてよい。"Le Magasin Pittoresque" と比較すると、片手式指文字（図2）のZを表現するときに、人さし指でアルファベットの形をなぞるような空書きのデザインが施されていないという相違点があるが、本文ではZを空書きすることが補足説明されている。しかしJにおいては "Le Magasin Pittoresque" においても指の動きが静止しているように見受けられる。

ところで、NMの記事を聴覚障害教育史という視点をもって読むと、ド・レペの次世代として聴覚障害教育を推進したロシャンブロワーズ・キュキュロン・シカー

指文字の浸透

ル(1742-1822)の事業についての言及がなく、情報に偏りがあるといわざるをえない。タイトルにあるように聴覚障害教育よりも指文字に関心が置かれた記事であった。

日本において指文字が認識された瞬間が NM の将来によるものであると仮定するならば、将来の時期と閲覧者による指文字の発見が焦点になろう。幕府が受け入れた蘭書の記録より NM が将来された時期と内容をまとめると表 1 のようになる¹⁰。

表 1 NM の将来過程について

年	将来された書籍の表題	年代	冊数
1839年 (天保11)	子ードルランツ マガゼイン	記載なし	記載なし
1845年 (弘化2)	子ードルランツ マガゼイン	記載なし	11冊
1845年 (弘化2)	子ードルランセ マカゼイン	記載なし	2冊
1847年 (弘化4)	子ードルランツ マカゼイン	1834年	1組 但2冊
1847年 (弘化4)	子ードルランツ マカゼイン	1836年	1組 但1冊
1851年 (嘉永4)	子ードルランツ マガゼイン	1847年、 1848年	3冊
1851年 (嘉永4)	子ードルランツ マガゼイン	1836年、 1837年	2冊
1851年 (嘉永4)	ニューエネードルラン ツセマガゼイン	1851年	1冊
1852年 (嘉永5)	子ードルランツ マガゼイン	1846年 から 1850年	5冊
1853年 (嘉永6)	子ードルランツ マガゼイン	1852年	7冊 但端本
1854年 (安政1)	子ードルランツ マガゼイン	1834年 から 1849年	16冊
1858年 (安政5)	子ードルランツ マカゼイン	記載なし	1冊

書籍名で文頭にある「子」は「ね」とよむことから、「子ードルランツマカゼイン」は NM をカタカナ読みにしたものであり、1839 年から 1858 年の長きにわたって、出版よりやや遅れて将来され、1850 年に多く購入された傾向があるといえよう。「冊」は Volume を示すと思われるが、将来された際に年ごとにひとまとまりに合冊されていたのか、ばらけた状態だったのかによって左右される。正確にいえるのは、1847 年と 1854 年に NM が将来されたときに 1834 年の分が含まれていたということである。

2. 2. 「珍奇」としての西洋指文字 - 蘭癖大名と蘭学者のコミュニティ

NM が定期的に将来されていることを表 1 でたしかめたように、1850 年代には輸入量が増加しており、その雑多な内容は日本国内において需要があった。NM は他の蘭書と同様、正規ルートとしてはオランダ船によって長崎に到着したのち、幕府に運ばれる。幕府で蘭書を収蔵・管理する機関が蕃書調所である。ここで重要になるのは、蕃書調所の頭取であった古賀謹堂（謹一郎、1816-1884）である。

謹堂は佐賀の鍋島藩士・古賀精里（1750-1817）の孫、侗庵（とうあん、1788-1847）の子として生まれた。古賀家は精里から謹堂の三代にわたって幕府の儒官として出仕し、精里はロシアとの交易を主張し、侗庵は『海防臆測』（1838 年成立、禁書）によって開国を主張し、積極的に交易を行うべきだとしていた¹¹。謹堂の葬儀において、少教正であった神代名臣の祝詞によれば、1836 年に幕府に出仕したのをはじまりとし、蕃書調所が開設されたときには頭取となった。明治になると官を辞職し、徳川家について静岡に行き、1873（明治 6）年に東京に戻ったのち、1884（明治 17）年に亡くなったことが読み上げられている¹²。

謹堂の業績で、もっとも知られているのは 1843（天保 14）年に帰国した漂流民の談話を記録した『蕃談』である。蕃書調所に勤務経験のある市川兼恭（かねのり、1818-1899）は、謹堂についてドイツ語の学習や活版印刷の実験を命じられたことを回想している。それによれば、謹堂は儒学者でありつつも、海外の動向に敏感であり、蕃書調所を通じて海外の情報を積極的に吸収しようとしていた¹³。

謹堂が統率した蕃書調所における共同作業の代表的な事例のひとつに、NM の翻訳事業がある。これを反映したものとして謹堂が『度日閑言』（たくじつかんげん、26 冊、未刊、国会図書館・慶応義塾大学図書館蔵）を取りまとめている¹⁴。これは蘭書にみえる記事を和訳し、さらに漢訳するというかたちであり、さらに記事ごとの末尾に謹堂による批評がつけられることを特徴とする¹⁵。この翻訳で使われた蘭書のほとんどが NM であり、しかも全ての年に及んでいることから謹堂がつぶさに NM を把握しようとしていた身振りが浮かぶ。つまり、NM は幕府が海外情報を把握するために日本に将来された蘭書のひとつだったのである。宮内庁本の NM には、『度日閑言』に掲載された記事が青色の筆あるいは鉛筆によって枠に囲まれていることから、謹堂が手元において使用した私的に近い蔵書である。宮内庁図書館蔵に献納

された謹堂旧蔵の漢書類は「古賀本」と名付けられているが、このなかに NM は含まれていない。しかし、古賀家三代の蔵書目録、NM の付箋や書き込みは謹堂独特のものであると思われることより宮内庁本の NM は「古賀本」の一部であったとすべきである¹⁶。なお、謹堂の私的な書類のいくつかは、慶應義塾大学の三田メディアセンターに所蔵されているが断片的である。大量に遺された蔵書類は謹堂歿後の古賀家凋落とともに散逸し、行方は杳として知れない。

謹堂の日誌を採録した『謹堂日誌鈔之一』によれば、1848（嘉永元）年3月29日の条に「〔池田〕オハマガゼイン壺本を携へ示す依りて是を訳せんと相談す」という一文があり、この時期にはすでに NM の翻訳が検討されている¹⁷。これを表1と比較すると、NM が将来された中間期に位置する出来事である。そののち、出版年が重なりつつもコンスタントに複数の NM が将来されており、西洋の知識を幅広く包摂するという需要の高まりを裏付けるものである。宮内庁本の NM をひもとけば、指文字の記事 "DE VINGERSPRAAK" の横に「指談」と朱でかかれた付箋が貼り付けられている。「指談」はオランダ語の "VINGER"（指）と "SPRAAK"（話）を合わせた字に対応する直訳であり、指文字による会話である意であることが理解されていた。この付箋に「指談」と書かれた瞬間は、日本人による指文字の命名がされたときであった。

この付箋が貼り付けられた時期については、1834年6月号にある指文字の記事のあとに、蒸気機関について書かれた記事が重要であろう。この記事は『度日閑言』11巻に採録されていることから、11巻が執筆された時点で、NM の1834年6月号が将来されていたことは確実である。この11巻においてもっとも新しい記事は、1854年のアメリカの道徳に関する記事である。よって、少なくとも1854年以降の日本には、NM の1834年6月号が存在していることになる。表1と総合して考えると、「指談」と記された付箋が貼り付けられたのは早くて1847年から1854年のあいだに絞りこめる。要するに、明治以前に西洋指文字の認識がされていたことになる。

もうひとつ、蕃書調所において NM が活用された事例として箕作阮甫（げんぽ、1799-1863）の『玉石志林』（4冊、老皂館）がある。阮甫は、江戸末期の津山藩医で蘭学者であり、オランダ語を能くしたこと幕府に出仕し、天文方、蕃書調所で重きをなした人物である。業績として幕府の外交文書の翻訳にかかる業務やオランダ語の文法書『和蘭文典』の編纂が著名である。『玉石志林』は、国立国会図書館や国内の大学図書館が所蔵していることより流通したものと考えてよい。出版年については奥付を欠くことから不明であるが、阮甫が亡くなる1863年以前に成立したものであろう。内容は、NM も含む海外記事を抄訳したものである。蕃書調所に出仕した学者たちで NM の翻訳を分担したことを記した史料によれば、1857（安政4）年から1860（万延元）年の4年間にかけて集中的に取り組まれている¹⁸。当初は『月

刊志林』として出版する予定だったが、他の年代の NM と他の蘭書からも補完することで阮甫『玉石志林』となったという見解が示されている¹⁹。

『度日閑言』と『玉石志林』はいずれも海外情報がまとめられたものであり、NM が中心に活用されていた。『度日閑言』における盲人・聾者に関する情報は、ド・レペの記事、盲人の記事などがみられるが、指文字についてはまったく言及されていない²⁰。結局は謹堂の旧蔵になる宮内庁本の NM に「指談」と貼り付けられているが、そのみであって『度日閑言』で言及されてはいないのである。彼らは西洋指文字を認識しつつも、関心を寄せなかったのだろうか。そうではない。

彼らの関心をよく示すものとして『藝海餘波（げいかいよは）』がある。この史料は全 17 冊からなるスクラップ・ブックで、1948（昭和 23）年に早稲田大学図書館が古書店から購入したものである。内容としては、楮の下地に日本、オランダ・中国からの船舶品や書籍の扉、引札、挿絵の原本・複製が雑多に貼りこまれている。

貼り込みは近世蘭学の名家からの贈答品、篆刻、詩文、東洋からの渡来物といったものが豊富であることを特色とし、とりわけ相撲番付のように蘭学者たちの一覧である「蘭学者相撲見立番付」が含まれていることより名高い。これらのヴァリエーションの広範さと、ほとんどが入手困難な高級なものであることや蘭書の流通が制限されていた社会背景を鑑みた結果、『藝海餘波』を作成したのは、将軍家に連なる家柄である岡山の津山藩（現・津山市）の藩主で、蘭癖大名でもある松平斉民（なりたみ、号・確堂、1814-1891）の旧蔵になると推定されており、本論もこれに従う²¹。このなかに指文字の図が貼り付けられているのを確認しよう（図 6～8）。

指文字の浸透



図6 『藝海餘波』
(早稲田大学中央図書館蔵、右下に指文字の図が2点ある)

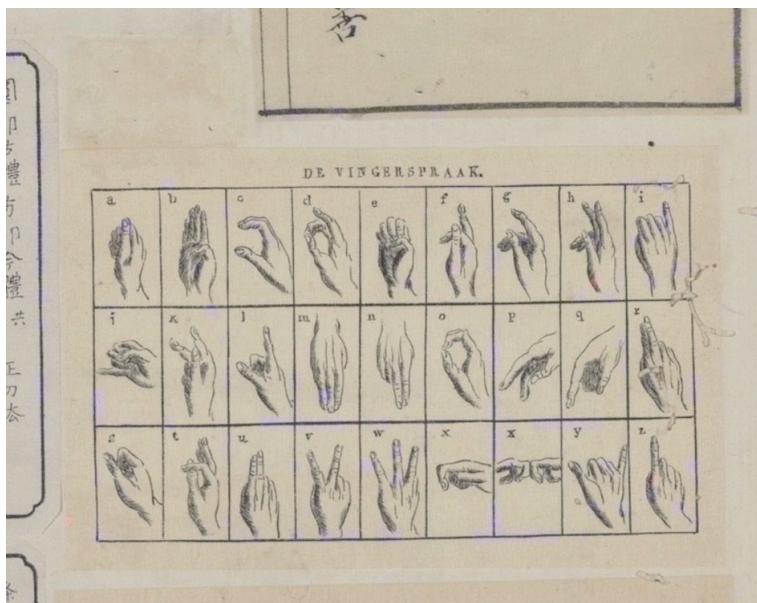


図7 『藝海餘波』における片手式指文字
(早稲田大学中央図書館蔵、部分、縦 86mm、横 148mm)

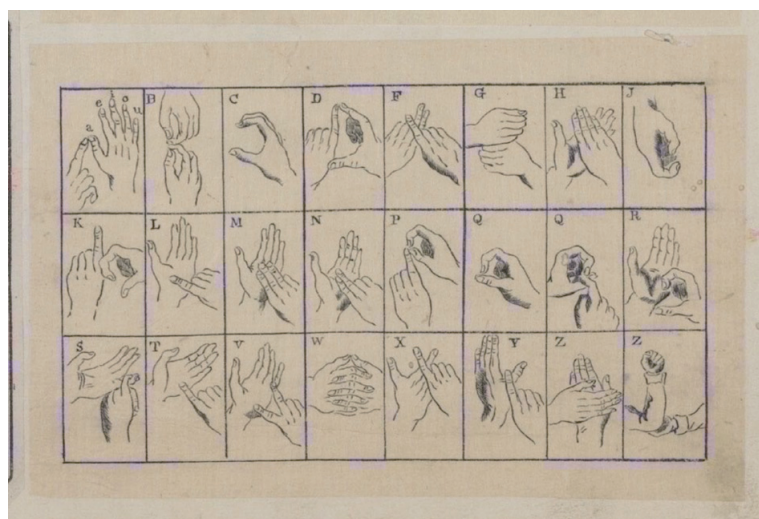


図8 『藝海餘波』における両手式指文字
(早稲田大学中央図書館蔵、部分、縦 88mm、横 150mm)

『藝海餘波』に貼り付けられている指文字(図7、8)はNMの1834年6月号に掲載された指文字の記事に付された2枚の図と同一の構図であり、NMの原図とほぼ同じ大きさである。しかし、これはNMを切り抜いたものではなく、三桎に手書きされた模写である。これを観察すると、爪先の形がやや不一致であるなど、細部で相違点がみられるものの手の向きや指の形が極めて類似しており、稍巧であることからNMを実見しながら模写したものである。

2枚の指文字図の上にあるのは、中国・宋代の文天祥による正気歌を黒墨で記し、その右に邪気歌を朱で併記したものの末尾にあたる部分である(図6)。この二文はさらに楷書と草書体で記されるという対比性の強いものであり、最後には「積善」と読め、邪気歌の末尾にある「明和六年」(1769年)の年記から、中井竹山(1730-1804)の手になる可能性があろう。指文字図の左側には「竹亭」が刻んだという実印が押捺された引札がはりつけられ、次の丁には上層階級の男女の日常と思わしき物語の挿絵を簡素に着彩模写したものが貼りつけられている。他の頁には、蘭学者・杉田玄白、大槻玄沢の刷り物、西洋人と軍人の服装・肩章、天保15(1844)年のオランダ船図がはりつけられており、いずれも市井に広く流通したとはいいいがたいものである。これらの雑多な内容から明確な年代を推定しがたいが、その全体性からして幕末に作られたものであることは明らかである。言いかえると、西洋指文字の情報が含まれた1834年6月のNMは幕末に将来されていたことになろう。

ここで、指文字図が斉民に提供された経緯という課題が生じうる。『藝海餘波』の貼付物は大概磐溪に由来するものが多数あると指摘されており、たしかに磐溪のスクラップ・ブック『積塵成山』と比較すると同種の図が貼られていることが指摘されている²²。まず、留意しなければならないのは磐溪と NM のあいだに直接的な関係を見出すことは難しいということである。まず、磐溪が蕃書調所に出仕しておらず、閲覧に規制があった蘭書としての NM を自由に実見することはできなかつただろう。それでありながらも磐溪に可能性を求めるのはやや前のことになるが、斉民の動向を記した日記による²³。

一、大槻平治郎へ五郎〔昌谷精溪カ〕手筋御□作御直々御頼ニ付、金
三百疋被下斗
右同人〔盤溪〕義、阮甫手筋ヲ以珍敷もの毎度入御覧候ニ付、□多葉粉・
かる□□地三百枚被下取斗

この部分は 1845 年（弘化二年）12 月 28 日の条であり、冒頭にみえる人名「大槻平治郎」は磐溪のことである。ここで見つめたいのは「右同人〔盤溪〕義、阮甫手筋ヲ以珍敷もの毎度入御覧候」という一文で、磐溪が阮甫のものになる珍しいものをよく見せ、斉民が褒美をとらせていたことを意味する。『藝海餘波』と『積塵成山』における貼り込み物の共通性を考慮すれば、指文字図も磐溪が NM から模写されたものを入手し、斉民に謹呈した可能性がまず考えられる。

次に、斉民に近く、なおかつ蕃書調所に出仕し、そこで模写された図版を持ち出せるという上位の人物を検討するべきであろう。それは津山藩士であり、蕃書調所に出仕した宇田川・箕作両家である。

宇田川家は玄随（号：槐園、1755-97）、玄真（号：榛斎、1769-1834）、榕庵（1798-1846）、興斎（1821-1887）と続く家であり、玄真・榕庵は天文方の蛮書和解御用に任命され、化学・植物学・科学技術に関する翻訳事業に功があった。宇田川家も斉民に印刷物などを謹呈したことが「藝海餘波」の貼り込みからうかがえる。興斎もまた 1854-55 年頃に『瑪鷲摂應地震予防説』を 1844 年の NM から訳したと冒頭に記しているように、NM を実見することが可能であったが、興斎は蕃書調所には出仕しておらず、蛮書和解御用で閲覧した可能性がある²⁴。

箕作家は先述した阮甫、省吾（1821-1847）、秋坪（1825-86）、佳吉（1857-1909）らを輩出した藩医の家であり、オランダ語をはじめとする語学も能くした。この時期、斉民も阮甫も江戸に滞在していた。阮甫は幼少期の怪我によって右手に障害が残ったために、武士の道を断念し、医師となった経歴がある²⁵。そのためか、障害児教育に関する文献を所蔵していることが判明しており、阮甫の『八紘通誌』（1851-1856）でも西洋の教育事情が述べられている²⁶。

斉民の手に残る指文字の二図は極めて模写の技能が高いものであって、蘭書を閲覧できる専門職によるものと考えられるべきであろう。そもそも、蘭書から図版を模写することは蘭学の発祥ともに行われていることであるし、近世大坂の代表的な文人・木村兼葭堂（けんかどう、1736-1802）が求めた蘭書は木村のコミュニティにおいて閲覧されていた。それは石川大浪（1762-1817）ら蘭学の知識をもつ画家に模写され、近世の洋風画の形成に連なっていることが明らかにされたように、蘭書の図版を模写することは以前から行われることであった²⁷。この系譜上にある西洋指文字図を模写したのは、天文方あるいは蕃書調所において地図の作成、書籍の図版を複製する業務を請け負った絵図調であっただろう。

絵図調は1857（安政4）年に蕃書調所のなかに設置された部門であったとされる²⁸。ただし、実際は1856（安政3）年にさかのぼるだろう。謹堂に近い立場であった佐渡出身の蘭学者・柴田（新発田）収蔵（1820-1859）の江戸日記をひもとけば、1856（安政3）年の後半の日々、図を写すことに精を出している²⁹。1856（安政3）年10月27日にはNMに関する記述として「晩に古賀〔謹堂〕に至り久保田に英舶渡来の簡を返す。（…中略…）和蘭宝函千八百・・・年・・・を中に・・・国の攀胎合体の図説あり。」とあるところから、柴田はNMを実見できた³⁰。なお、成田によれば、柴田は1856年の12月23日に蕃書調所の絵図調に任命されている³¹。教育史や美術史において絵図調の創始が1857年とされる以前のことであり、検討する必要がある。

ここまで、指文字図が斉民に謹呈された過程を推定すると、阮甫が斉民に謹呈したか、あるいは磐溪を経て斉民に謹呈された可能性がまず高く、指文字図の模写をしたのは柴田のような蕃書調所の絵図方か謹堂に近い立場の人物であると考えのが妥当である。磐溪と阮甫のどちらかが謹呈したものではなかったとしても、NM自体が蕃書調所にある以上、それを実見できる蕃書調所の蘭学コミュニティから斉民が入手したことは疑いない。

発見から模写、提供という一連の身振りは近世における日本人の西洋指文字に対する関心の反映であった。しかしこの西洋指文字は日本に流布する — 浸透するものではなく、身分制社会のもと、蘭学に強い関心を持つ上位の個人と彼と交流のある学者たちによってその手元に留められるに過ぎなかった。『藝海餘波』が蘭癖大名のコレクションとして西洋指文字の図のみが貼り付けられているが、記事の本文が添えられていない。このことが示すのは、西洋指文字は、珍奇の対象として捉えられ、その背後にある聴覚障害教育の概念・思想はかき消えるものだったのではないということである。あるいは、提供者が本文を入手できなかった、解読できなかったことが想定される。じっさいのところ、斉民は蘭学者ではなかった。

そう考えるならば、斉民が珍奇として捉えた理由としてローマ字と日本語という関係がみえてくるだろう。江戸時代においてアルファベットをローマ字として日本語

と対応して読むことは吉宗による洋書輸入のある程度の許容によって、蘭学者において続けられていたが、重要な契機としては1867（慶應3）年にアメリカ人医師・ヘボンによって編纂された英和辞典『和英語林集成』にあるとされている。つまり、近世日本において主要な外国語であったオランダ語を日本人が発音するには、そのアルファベットと日本語の発音の対照性を熟知していなければならない。蘭学者・前野良沢（1723-1803）にいたっては外国語の発音について子細に考究しているが、多くの語学学習書においてはアルファベットに発音記号としてカタカナを書き添えて表記する形式であり、ネイティヴからすれば不正確な発音であったことは否めない。ローマ字という存在が確固でなかった時期においては、アルファベットから創出された西洋指文字からヒントを得て日本の「いろは文字」に応用し、日本独特の指文字として表現するという演繹的な展開には困難が伴っていたのではないだろうか。ゆえに、蘭癖大名でありながら蘭学者ではない齊民の目には、西洋指文字は聴覚障害教育に不可欠なものという情報が伴っておらず、むしろ珍奇なヴィジュアル・イメージとして受容されたのではないか。

3. 洋学

3. 1. 田中芳男における指文字の理解とウェブスター辞書

齊民の『藝海餘波』に貼りこまれている指文字の図は、蕃書調所が所蔵するNMに接することが可能であった宇田川・箕作両家か、磐溪のいるコミュニティから入手されたという見通しを立てた。しかし、これは彼らのコミュニティを飛び出るものではなく、内部に留めおかれるものであった。このような滞留から日本国内において西洋指文字が浸透する機会はいづを基にすべきであろうか。

繰り返しになるが、幕末における開国は、蘭学にとって洋学に姿を変えるものであった。それは、オランダ一辺倒ではなく、アメリカ、イギリス、ロシアとも交流することによって海外の知識を包摂することが積極的になる時期であった。一方で、その包摂の基礎となる外国語学習においても変化をもたらすものであり、オランダ語から英語中心に多くの言語が学ばれる環境に転換する過程があった。外交政策の展開による言語的な混乱は、たとえば福沢諭吉が横浜を訪れたさいにこれまで勉強してきたオランダ語がまったく通じず、ひどく落胆するとともに英語学習を決意した逸話がある³²。

そのさなか、日本と西洋の聴覚障害教育の接点において海外使節による実見があったことを中野と加藤が指摘している。二人がいうように、アメリカにおける聴覚障害教育の現場で聾者同士が手で会話している状況が彼らの記録——日記に書きとめられている。しかしこれは実見であって、学習ではないことに留意しなければならない。使節たちは見学してはいるが、極めて短期間の滞在においてそれを習得することはできなかったと考えるべきであろう。そうであるならば、日本人による西洋指

文字の受容をどのような経緯で検討すべきであろうか。まず、ある記事を読んでみたい。

田中芳男先生より啞を教ふる説を寄せられたるに啞と応対するとき交互に手間似を以て用を弁するハ日本ハ勿論西洋にも同様なれともエビシ文字の形を手指にて摸し言語を綴り語るとなれば稍巧なり〔沕武私的舛字書〕に図あり然るに近年啞は即ち生来の聾にして言語の機関あれとも言語を人に聞くの機関なきのみ故に真に不具なるものの外は大抵啞をして言語を出さ志むべし勿語人の口唇の振動を見て他人の何を云ふやを知るのみにして自分より云ふ所の耳に入るを知らず因て啞と語るには必ず相對して唇を彼に見すべきこととぞ

この記事は、『内外教育新報』（1878年3月26日（19号））に「啞を教ふる説」という見出しで掲載された。『内外教育新報』は東京の教育社が刊行していた教育関係の新聞・雑誌であり、東京、横浜、神戸、大阪で販売されていた。当初は新聞の形式であったが、雑誌に変更されている³³。

田中芳男（1838-1916）は長野県の飯田生まれ、伊藤圭介（1803-1901）に学び、1862年に蕃書調所の物産方出役に任じられた。幕末から明治初期にパリ、ウィーン、フィラデルフィアで開かれた万国博覧会に派遣されており、西洋の実態に接する機会があった。この経験をもとに日本における内国博覧会の運営にも関わっており、農学、植物学、動物学において顕著な業績があった。すでに吉宗の時代において植物・動物・鉱物を収集し研究する学問としての物産学の成立がみられたが、田中はこの系譜において最後の世代に位置する人物として、また近代日本の博覧会行政の開創を語るにあたって不可欠な人物である。

西洋との接点経験を豊富に有する背景をもつ田中が聾者とのコミュニケーションする方法について情報提供し、論評する形式は洋学者の聴覚障害に対する認識という意味において重要な情報を含んでいる。1878年の3月末に掲載された記事であるが、この5月には京都で盲啞院が開校される直前であることが興味深い。田中の発言が『内外教育新報』に掲載されたのは、教育社の社長が弟・田中義廉であったことによるのだろう。つぎに記事の内容を検討するために現代語訳した文を示す。

田中芳男先生より聾者と意思疎通する方法を寄稿されました。聾者と会話するときはお互いに身振りによってやりとりをすることについて日本はもちろんのこと、西洋でも同じことですが、西洋ではアルファベットを手と指でつくって綴りながら語るところが大変細かい。これはウェブスター辞書に図が載っています。つまり最近では、啞とは生まれつ

きの聾者のことであって、言葉を理解することはできるけれど、言葉を発声して聞くことはできない。だからまことに不具なるものでおおよそ啞に言葉を出させてはいけません。語っている人の口の動きをみて、その人が何を言っているかを知るのであり、自分自身の声が耳に入っていることはありません。ですから、聾者と語るときには必ず正面を向いて口を見せるべきです。

まず、啞という語句について確認しよう。「啞は即ち生来の聾にして」は啞とは生まれつきの聾＝耳が不自由なことであると解釈できるが、田中が解説をしていることじたい、明治初期における聾と啞の概念が混和めいている様相があったことを示す。それは英華辞典における Deaf と Dumb と中国語との照応、近代の身体機能への探求といった生理学の問題とも重ね合わせて解くべき事柄であろう。

つぎに、田中は日本と西洋の比較に着目している。啞が「手間似」をもって意思疎通をすることは日本と西洋の共通項であって、しかし西洋ではアルファベットを手で綴るものがあるという差異を示す。近世日本において、身振りでコミュニケーションをとる聾啞者の姿が語られてきたことを考えてみれば、ここである「手間似」はホームサインなど小さなコミュニティにおいて通ずるものと解される。西洋におけるアルファベットを綴りながら表現することについて「稍巧」と田中の驚きの感情が示されている。この「稍巧」という表現には、聾者が指文字で意思疎通することを理解しつつも、指文字を珍奇の対象としてみなす残滓も感じられるものでもあり、ここに二重の感情が見え隠れしている。

その西洋におけるアルファベットを手で綴ることについては「沕武私的聾字書」に図があるという。判読困難な漢字が羅列されているが、これは外国語を漢字の音をあてて表現する音訳である。音訳にしたがって読めば「うゑむすてゐ」となり、末尾の「字書」は「じしょ」、つまり「辞書」の意である。「沕武私的聾字書」は「うゑむすてゐじしょ」となり、ウェブスター辞書の事であることがすぐに了解されよう。

ウェブスター辞書の正式名は "An American dictionary of the English language" というが、編集者のノア・ウェブスター (1758-1843) を冠してウェブスター辞書という名が広く流布している。ウェブスター辞書は 1825 年 1 月に原稿が揃い、1828 年に刊行されて以来、改訂をかさねてきた歴史があった³⁴。ウェブスターが亡くなった 1843 年以降は、娘婿のチャンシー・A・グッドリッチ (1790-1860) によって改訂が重ねられ、ウェブスター辞書は大辞典、中辞典、小辞典といった需要に応じて 5 系統があったことが指摘されている³⁵。この分岐や改訂の歴史において、図版が掲載されるのは 1859 年版の大辞典 "An American dictionary of the English language" であった³⁶。この辞書をひらいて、片手式指文字が掲載された図版をながめてみよう (図 9)。



図9 "An American dictionary of the English language" (1860)
(アメリカ議会図書館蔵。同書は1860年版であるが、1859年版と同一の図版である)

1859年版における図は、本文の前に "Pictorial illustrations for Webster's unabridged dictionary" として配置されている。多くの図版は、スコットランドのグラスゴーで発行されていた "The Imperial Dictionary" からの引用である。しかし、"The Imperial Dictionary" に片手式指文字の図は含まれていない。というのも、ウェブスター辞書の編集方針として "The Imperial Dictionary" はイギリス向けであるとし、アメリカの人々のために新しい図を組み込むという方針があったからである。これは激化する辞書出版に対応するための措置であり、かつアメリカ人のための辞書を主張していたウェブスター辞書のコンセプトによるものであった。指文字の図もアメリカの聴覚障害教育の事情にあわせて片手式指文字が含まれることになったのである³⁷。図9は、コネチカット州ハートフォードにあったアメリカ最古の聾学校であった "The American Asylum" の年報（1843年）より掲載されるようになった片手式指文字図と手指の形状や陰影が類似していることから、同系統であろう³⁸。しかし本来、アメリカ手話における指文字の J は小指で、Z は人さし指でアルファベットをなぞる動きによって表現されるが、図9の J と Z の指先に点線がつけられておらず、指先が静止している。同系統であると思われる "The American Asylum" の年報では正確に表現されているが、ウェブスター辞書では表現されていない。このデザインが日本における西洋指文字の流布において重大な問題を生むことになる。

よく知られているように、アメリカにおける聴覚障害教育の発展は、トーマス・ホプキンス・ギャローデット（1787-1851）が深く関与するものであった。ギャローデットは1815年にイングランド、スコットランドで聴覚障害教育を学ぼうとしたが叶わず、シカールの講演に参加したことが縁となり、パリにわたって学んだのちアメリカに帰国し、教育に取り組んだ経歴があった³⁹。ウェブスター辞書の将来については、"Emperor of Japan" — おそらく天皇が500冊のウェブスター辞書を購入したことが指摘されており、明治新政府や各地の藩校において定期的にウェブスター辞書が購入されていることから、幕末から明治初期の蘭学から洋学に重心が変化し、英語学習の需要が高まることに起因している⁴⁰。たしかに、国立公文書館の内閣文庫においても、大辞典だけで56件のウェブスター辞書が確認され、国内で最大のコレクションを誇っている。

ところで、田中が指文字を認識していたことはウェブスター辞書のみに留まるものではない。田中が博物学の知識を援用しながら、国内外における興味・関心のままにまとめた『拮拾帖』（くんじゅうちょう、東京大学総合図書館蔵）という史料がある。これは生前の田中が安政期から収集しはじめた印刷物や略暦の引札や薬袋、缶詰のラベルにいたるまで雑多な印刷物を年代順に貼りこめたスクラップ・ブックである⁴¹。田中は植物・動物の博物学的研究に功績があった人物であり、標本が残されているが、このスクラップ・ブックもその延長として位置付けられる。田中の興味や関心を反映したコレクションという要素があるという点において、先の斉民『藝

海餘波』と共通するが、斉民は徳川家につながる藩主であることもあり、入手困難な貼込物を中心に構成されているのに対し、田中においては一般に流通していたものも貼られているという違いがある。

さて、わたしたちはこの『摺拾帖』のなかに、『西洋指嚙圖』が貼られていることを発見しなければならない(図10)。

3. 2. 加藤雷洲

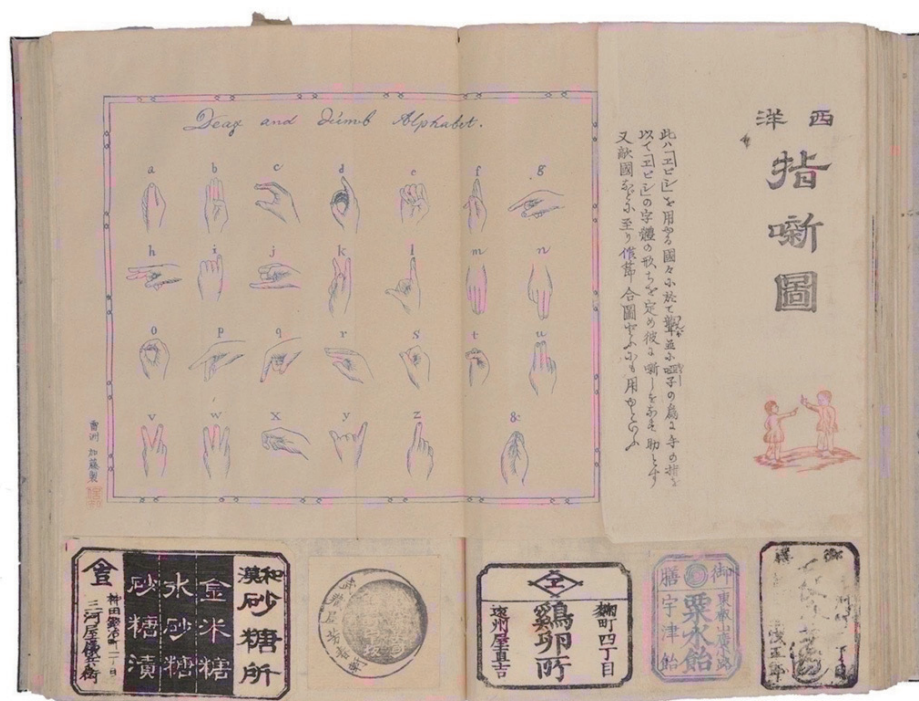


図 10 加藤雷洲『西洋指嚟圖』
(田中芳男『摺拾帖』 東京大学総合図書館蔵 A00-6010)

『西洋指嚙圖』は向かって右に包紙、その横に本紙が貼られている。包紙には『西洋指嚙圖』と記された表題の下に、手を出し合う人物2名が銅色で印刷されている。その左には指文字の説明文がそえられている。

此ハ「エビシ」を用ゆる国々に於て聾（つんぼ）並ニ啞子（おおし）の為に手の指を以て「エビシ」の字体の形ちを定め彼に嘯しをなす助とす又敵國などに至り候節合圖とふにも用ゆといふ「文中の丸括弧はルビを示す」

本紙は縦 185、横 228mm、周囲に飾り枠があり、内側の上部に Deaf and Dumb Alphabet と筆記体で記され、A から Z のアルファベット順に「&」を加えた 27 語の片手式指文字が左から右に配置されている。全体は青色一色で刷られており、縦に折り目が 3 箇所あることから本紙は包紙のなかに包まれるのが本来の形態であった。これらの包紙と本紙は木版で彫られている。

本紙の枠外には「雷洲 加藤製」と署名されており、版元は記されていない。その下には陽刻された「信知」印がある。加藤のプロフィールについては、1877（明治 10）年 5 月に加藤自身が画学校を開くために東京府に提出された開校届に、履歴書が添えられている⁴²。

一 教師履歴 士族 加藤清人 明治十年五月 四拾九年三ヶ月
元椿椿山門人其後洋画ヲ修業仕明治一年三月横浜在留英国画師ウック
マン氏門人ニ相成修業仕同二年六月横浜製鉄所勤役中同所御雇仏人絵
図方ウェット氏より図学伝授相置其後土木寮江勤役中同所雇蘭人ハン
ドールン氏ヨリ地図学伝授相置其後量地課勤役中同所御雇英人ニ相附
地図学修業仕候

1877 年当時で 49 歳であるということは、逆算すれば 1828（文政 11）年頃の生まれになるが、位牌によれば 1833（天保 4）年生まれであるという見立てがされた既往研究を支持しておきたい⁴³。加藤は 1895（明治 28）年に亡くなったという⁴⁴。

この履歴には官吏であったことが記されておらず、不完全であるので、職歴を復元しておく必要がある。まず、加藤は日本画家・椿椿山（1801-1854）の門人としてスタートし、明治になってからは少なくとも 4 人の外国人のもとについて修行をしたことが記される。まず、イングランド人画家のチャールズ・ワーグマン（1834-1891）のもとにおり、1869 年 6 月にはフランス人のウェットについたとされる。横浜製鉄所は、横須賀製鉄所とともに幕府から明治政府の工業部門を担ったところであり、当初はフランス人を雇用していた。履歴書にあるウェットは横浜製鉄所が雇ったフランス人であり、職務は「鑪鑿（りよろ）頭目」であった⁴⁵。ウェットは 1870 年 4 月から製鉄所内の伝習生徒に指導を行いはじめたが、11 月に亡くなっている⁴⁶。

その後の動向については、明治政府官吏の名簿に依る。ここで確認できるのは、1871 年 12 月に「大蔵省 土木寮 十三等出仕」、1873 年に「大蔵省 土木寮 十二等出仕」、1875（明治 8）年に「内務省 地理寮 二等中技手」と異動していることである⁴⁷。明治政府の土木部門は、民部省の土木司からはじまり、1871 年 7 月に工部省に、10 月に大蔵省の土木寮に移管。その後、1874 年 1 月に内務省（1873 年設置）に移るといふ、短期間で政府内を移管するという複雑な背景がある。ここでは、「蘭人ハンドールン氏ヨリ地図学伝授」とあるところをみよう。これはオラ

ンダのお雇い外国人ファン・ドールン（1837-1906）のことを指しているが、彼は1872年2月に来日し、1880年まで大蔵省土木寮と内務省土木寮に勤務していた人物であり、加藤の履歴と照合させると大蔵省土木寮で地図制作の技術を学んだことが想定される⁴⁸。その後、内務省 地理寮の下部組織であった「量地課」に勤務したとする。ここで学んだ「御雇英人」は土地の測量技術を持っていたマクヴィーンであることが指摘されている⁴⁹。

加藤はフランス語の単語集『佛語箋』（幕末から明治初期）を編纂したこともあったから、外国語も一定以上の理解ができる立場であったとすべきであろう⁵⁰。1876年には官吏の名簿から加藤の名前が見えなくなっているから、政府を退職したことがわかる。上記の1877年に提出された画学校の開校伺とも矛盾しない。

幕末における加藤の状況は不明であるが、加藤の娘である武田錦子（1861-1913）の経歴によれば、加藤は開成所に勤務していたといい、錦子を中村正直の同人社に入れ、錦子は1879（明治12）年に文部省派遣女子留学生としてアメリカにわたった⁵¹。開成所は、蕃書調所は1862（文久2）年に洋書調所となり、1863（文久3）年に開成所となっている。蕃書調所が1862年（文久2）年に洋書調所となったのち、翌1863（文久3）年に改称した機関のことを指す⁵²。しかし、加藤が開成所に勤務したことを裏付ける史料を見出すことはできない。

加藤の人物像について要約する。加藤は洋画・図学の技術を習得していることと、大蔵省の土木寮から内務省の地理寮に異動していることから、地図制作に不可欠な製図関係の技能を持っていた技術官僚である。かつ外国語を理解し、西洋の情報に接しやすい環境を有していた人物でもあった。加藤が明治政府に出仕していた期間は少なくとも1871年から1875年の比較的短期間である。加藤が修行を開始するのは椿椿山の門下であるというが、椿は師・渡辺崋山の素描をもとに蘭学者・高野長英の肖像画を描いたことで知られた画家であることを考慮すると、加藤が修行を開始した時点で、蘭学－海外情報に接触しうる環境にあったといえる。娘・錦子が同人社に入り、留学生としてアメリカにわたったことから加藤の海外に対する関心は高いものであっただろう。

『西洋指嚙圖』が作られた時期については版元や年記が記されていないため不明である。加藤による個人的な制作物だった可能性もあろう。これについていくつかの視点から検討しよう。

まず、田中が『摺拾帖』を作成するとき素材を年代ごとに整理して貼っているので、該当部分の前後の貼り込みが推定の手がかりになる。『西洋指嚙圖』が貼られた箇所下部には砂糖、鶏卵、水飴に関する屋号の入った引札があること、前後のページには江戸の地名が散見される。よって、幕末かごく初期の明治の東京で流通したものであろう。

『西洋指嚙圖』において見逃してはならないのは、端に小さく押捺された「信知」印である。1871年12月の職員録には「大蔵省 土木寮 十三等出仕」の下に「加

藤信知」とある。かりに加藤が「清人」と改名するまえに「信知」を名乗っていたとするなら、『西洋指嚙圖』も自然とその頃までに作られたものと考えられよう。また、この「信知」はもう一人の「雷洲」を名乗った人物を彷彿させる。それは安田茂平（1770 頃 -1859）こと安田雷洲のことであり、銅版工として、蕃書調所が成立した際には雇用が検討されるほどの能力があった人物である。明治以前に歿していることから、明らかに加藤とは別人である⁵³。しかし、安田雷洲の画帖（ライデン国立民族学博物館蔵）には「信夫」あるいは「信甫」の朱文方印を使っていたことが指摘されている⁵⁴。加藤がいたとされる開成所と安田がいた蕃書調所は同系統に属する機関であり、ふたりは近しい職場にいた。それだけでなく、「信知」「信夫」「信甫」という「信」つながり、同じ「雷洲」の号を名乗っていること、西洋に知見を有しているという複数の共通点は果たして偶然のことであろうか。この意味において二人の雷洲 — 安田と加藤は何らかのつながりがあった可能性も否定できない。

加藤が雷洲の名前で銅版を彫ったことが他に確認されるのは、橋爪貫一『世界商売往来』（1871-72（明治 4-5）年）と『箱根熱海温泉道案内』（1877（明治 10）年）であり、これ以降に雷洲の名を使っている痕跡は確認できない。

加藤と田中の経歴を合わせると、田中は 1873 年にウィーンにわたり、帰国直後の 1874 年 8 月に内務省の勸業寮出仕を命じられていることから、土木寮にいた加藤と同じ省内にいた時期が重なり、これ以外に接点をみることはできない⁵⁵。加藤が籍をおいていた内務省・大蔵省はウェブスター辞書が収蔵されており、製図関係の業務という性質からも閲覧することはおそらく困難ではなかった。

田中が『摺拾帖』に貼った時期、加藤のプロフィールと「信知」印、田中との関係を総合的に考察すると、『西洋指嚙圖』は幕末から明治初期において作成されたと比定してよい。また、橋爪のような開明派の人物と加藤が組んでいることと、田中のスクラップ・ブックに『西洋指嚙圖』があることから、加藤のコミュニティは洋学者の影が色濃いものであったといえよう。

『西洋指嚙圖』とウェブスター辞書の共通性をさらに検討するには、加藤が図版を寄せた『世界商売往来』と『箱根熱海温泉道案内』を著した橋爪貫一にフォーカスを定めなければならない。

3. 3. 橋爪貫一

橋爪貫一（松園・松家、1820-1884）は幕臣であり、1868（慶応 4）年 6 月に『日々新聞』『内外新報』といった新聞の出版を裁判所に申し出た際には、徳川亀之助（家達）の家来という肩書きになっていることから、幕府において出版に関与していたようだ⁵⁶。明治以降は『English Ballad patent 英語都々』（明治初期）の序において、「（前略）小可れは佩刀を廃拾經紀人と変じたれど肩に重量を負担能はず紙屑拾撫も朝寐好衆人の縦跡のみ巡羅て見ても更に生活立がたく敗落散場雑学者（後略）」と明治維新に

よって刀剣を手放し、士族から經紀人（商人）となるが、生活に困窮していることが綴られる⁵⁷。また、1872-1873（明治5-6）年のあいだに造船学の知識を有することで海軍省の「造船局分課艦船製造掛」に籍を置いていた。1872年4月からは足を悪くしており、在宅で勤務していることが記録されているが、まもなく退職している⁵⁸。幼年時に父を失い、歓楽にのみ身を任せた挙句に父の遺物を消散させてしまい、外国語文献を読む力もなく、歩行もままならないほど身体が弱っているというかつての自身を強く悔いている文章も残している⁵⁹。こうしてみると、橋爪は明治維新で特権階級であった士族の地位を失うことによって、これからの行き方を模索していたのであろう。海軍省を退職したあとは出版事業に集中しており、西洋の知見に基づいた子供用の啓蒙書や往来物を大量に発行している。父を失ったあとの挫折経験が子供用の啓蒙書を出すという教育事業への関与に連結しているように思われる。

さらに、橋爪は『童蒙手引草』（1873（明治6）年）で欧州の教育について「瞽目（メクラ）の学校に於いては之に教ゆるに凸字（ナカダカモンジ）の印板を摸（サダ）らしめ耳聾又ハ口啞を教ゆるに文字を写さしめ或は手の指を伸縮（シンシヨク）させて字形を造らしむ」と視覚障害・聴覚障害教育に言及している。読む人が漢字の意を理解できるように「実ニ盲者ニ杖ヲ與へ、暗夜ニ燈火ヲ點時シタルカ如ク・・・」とも書いたことがあるように、橋爪自身は海外渡航の経験を持たずありながら、渡航経験者から視覚障害・聴覚障害に関する知識を包摂している人物である⁶⁰。

橋爪が西洋の知見を編纂したものとしては『開知新編』（全10巻、1869（明治2）年）がある。これは西洋の社会全般について国の区別なく雑多に解説された啓蒙書である。橋爪は福沢諭吉と対比的に論じられ、『西洋事情』にあやかっで一山あてようとしたとされており、さほど読まれなかっただろうという指摘がある⁶¹。その『開知新編』は、指文字図が掲載されている（図11、図12）。

指文字の浸透

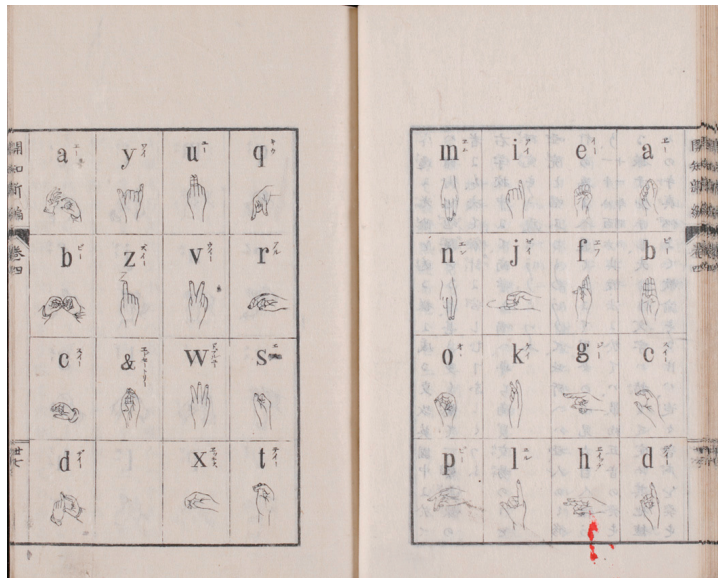


図 11 橋爪貫一『開知新編』4 卷
(梶屋喜兵衛、1869 年、26 丁ウ -27 丁オ) 八戸市立図書館蔵

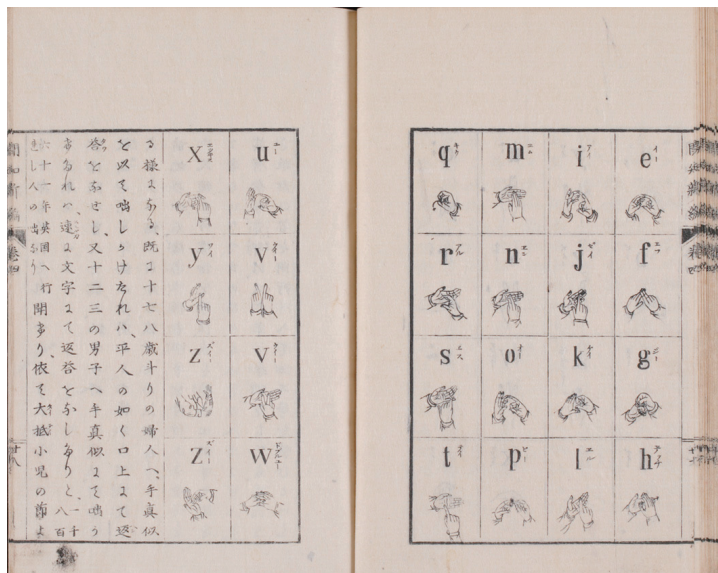


図 12 橋爪貫一『開知新編』4 卷
(梶屋喜兵衛、1869 年、27 丁ウ -28 丁オ) 八戸市立図書館蔵

この指文字図は、すでに中野・加藤によって明らかにされている⁶²。それによれば、海外渡航経験のない橋爪の情報源として、文久元年幕府遣欧使節の一員であった福田作太郎の『福田作太郎筆記』を参考にしているという。福田作太郎（重固（しげかた）、1833-1910）は、福田検校湊一（1799（寛政 11）年歿）、福田勾当喜一（1825（文政 8）年歿）、好政（1871 年歿）に続く家柄に生まれた幕臣である⁶³。江戸幕府は盲人に特権を与えていたが、検校・勾当は盲人として最高位とその次に位置する裕福層であった。好政は喜一の養子として福田家に入った人物であり、その息子が作太郎であった。つまり作太郎は近世盲人と直系であり、かつ西洋における視覚障害教育を知る機会ももつ人物であったのである。橋爪は銃器製造に関する訳書『塙氏砲論』（1866（慶応 2）年）を刊行しているが、福田も幕末に御鉄砲製造奉行となった経歴があり、銃器生産に関与していることから、二人に接点があるとすれば軍事技術の分野にあった⁶⁴。

つぎに、『開知新編』には片手式・両手式指文字が同時に掲載されているという特徴があるが、これは奇妙な構成である。というのは、本文中ではオランダ、フランス、イングランドの事情が混在して諸制度や社会全般について概説されており、この指文字の図が掲載されたのはイングランドにおける教育について概説している箇所である。しかし、イングランドにおける聴覚障害教育で使われていた指文字は両手式である。橋爪が二つの指文字の違いを明快に理解していないまま編集をしていることにならないか。

このようなレイアウトの混在が起きた理由を一言でいうなら、ウェブスター辞書における指文字図の変更が影響しているのではないか。ウェブスター辞書の 1859-1864 年版には片手式指文字の図が掲載されていたが、両手式指文字の図は併記されていなかった。これが載るのは、1865 年版以降である。その両手式指文字図が掲載されている "Dactylology" の項目をひらいてみよう（図 13）。

アメリカ人のための辞書として刊行されたウェブスター辞書の編集方針として、当初はアメリカにおける片手式指文字のみを掲載してきた。しかし、1865年版に更新されたときに、本文と図版が同じページに配置されるようになった。要するに、ウェブスター辞書において、片手式と両手式指文字の図が並列するのは1865年版以降である。さらに、"Dactylology"の本文には指文字の成立について片手式はド・レペが完成させ、フランスとアメリカで使われていることと両手式指文字はイングランドとドイツの事例として紹介されているように、ウェブスター辞書におけるアメリカからヨーロッパへの展開がある⁶⁵。それにもかかわらず、橋爪は国による指文字の違いについて『開知新編』において説明をしていない。

この指文字図の細部を比較すると、片手式指文字は袖に衣服の一部が見えず、手首だけがみえるが、両手式指文字は衣服の一部として袖口が見える。この袖口は皺にいたるまで橋爪『開知新編』と同一である。つぎに、加藤『西洋指噺圖』とウェブスター辞書を加えつつ、JとZの指文字を比較する（図14）。先にも述べたように、JとZは指を動かしてその字をなぞるという共通点があり、図版としては指の動きも表現する必要があった。つまり、イメージにおける動きをイラストとして表そうとする場合、指が動作している瞬間を選びとって表現しなければならない⁶⁶。

指文字の浸透



図 14 J、Z の指文字の比較図（筆者作成）

J と Z における指の動きに注目しつつ『西洋指噺圖』と 1859 年版のウェブスター辞書を比べると、どちらも片手式指文字のみであり、アルファベットの他に「Deaf

and Dumb Alphabet」と綴られるのはウェブスター辞書のキャプションと合致する。指の関節にラインが引かれておらず、指が静止したような絵である。また、手は陰影のみで表現されているため、手指全体に丸みが出ている（図 14 の上）。これに対し、『開知新編』と 1865 年版のウェブスター辞書では点線として指でアルファベットをなぞり、かつ指の関節にあたるところに線が引かれている（図 14 の下）。このようなアルファベットをなぞる指先と陰影、関節のかたちはひとつの結論を見出す。加藤が 1859 年版のウェブスター辞書を参照し、橋爪が 1865 年版を参照したのではないか。そう考えなければ、『西洋指嚙圖』になぜ両手式指文字が掲載されず、片手式指文字だけで構成されているのか、J と Z の表現において『西洋指嚙圖』と 1859 年版のウェブスター辞書において共通した静止するような指の表現になっているのか、また『開知新編』が片手式・両手式指文字を併置した理由について説明することはできない。

これを補強するものとして、田中の言葉をもういちど思い起こす必要があるだろう。「エビシ文字の形を手指にて摸し言語を綴り語るとなれば稍巧なり〔沕武私的舛字書〕に図あり」と。指文字を想像する田中の念頭にはウェブスター辞書があり、加藤の『西洋指嚙圖』も所有していた。その加藤と橋爪は刊行物を介して関係を持っていた。洋学のコミュニティによってかれらが人間関係を切り結んでいたとするなら、ウェブスター辞書を発祥とする西洋指文字の流布が可能だったのではないか。

残されている問題として、加藤と橋爪は国内に流布していた西洋指文字の表現を明瞭に理解していただろうかという問いがある。否である。まず、加藤がウェブスター辞書を参照し、その意味を理解していたとするなら、J と Z におけるウェブスター辞書の誤謬を修正せず、正確に写してしまっていることの説明がつかない。橋爪は前述したように片手式・両手式の指文字についての背景を解説していない。よって、この二人の西洋指文字の理解については疑念が残る。では、西洋指文字を理解していたのは誰が挙げられるだろうか。

遠くから足音を立てて、わたしたちの前にあらわれるのは伊沢修二である。

3. 4. 伊沢修二

伊沢修二（1851-1917）は、（現、長野県伊那市高遠町）の下級藩士の生まれで、藩で頭角を現し、早くから海外に強い関心を持ち、オランダ語と英語の学習に取り組んでいた。維新後は大学南校を経て、文部省官吏となった。退職後は民間における教育雑誌出版などの事業に関わり、台湾総督府の学務部長として日本語教育制度の整備を行った。また、全国的に吃音矯正を行う「楽石社」を設立した人物として知られている。

1871 年に設立された文部省における教育施策は、お雇い外国人で宣教師であったグイド・フルベッキ（1830-1898）、ダヴィッド・モルレー（1830-1905）による教育

行政の全体構想、文部省主導の日本人によるアメリカ留学を通じてアメリカの教育状況を包摂することが行われていた⁶⁷。伊沢も文部省から派遣され、1875（明治8）年から1878（明治11）年までアメリカ留学をしている。

伊沢のアメリカ留学は聴覚障害教育史において注目される事項がいくつかあるが、ここではメルヴィル・ベルとグラハム・ベル父子による聾啞者に対する口話法の代表的な理論である "Visible Speech" を見だし、自身の発音の悪い英語をベルに直してもらった際に "Visible Speech" を身につけたことを思い起こしておきたい。これは伊沢が後年、「視話法」とする独自の理論の土壌となるものである。聴覚障害教育史においては、川本宇之介をはじめとする識者のあいだで伊沢は口話法の先駆者として位置付けられおり、現在にいたるまで視話法を主題とした研究においては、"Visible Speech" と「視話法」を同義とされている。しかし既往研究においてはこの論理を示しておらず、根拠があるとはいえない⁶⁸。さて、伊沢は1884（明治17）年、文部省に籍を置いていたときに埼玉私立教育会の名誉会員として浦和教育講会で講演をする。その内容はアメリカで得た知識をもとにしたものであり、西村正三郎が筆記した。

この講演では、"Visible Speech" が中心的な話題であったが、その枕として言及されているのが指文字である（図15）。

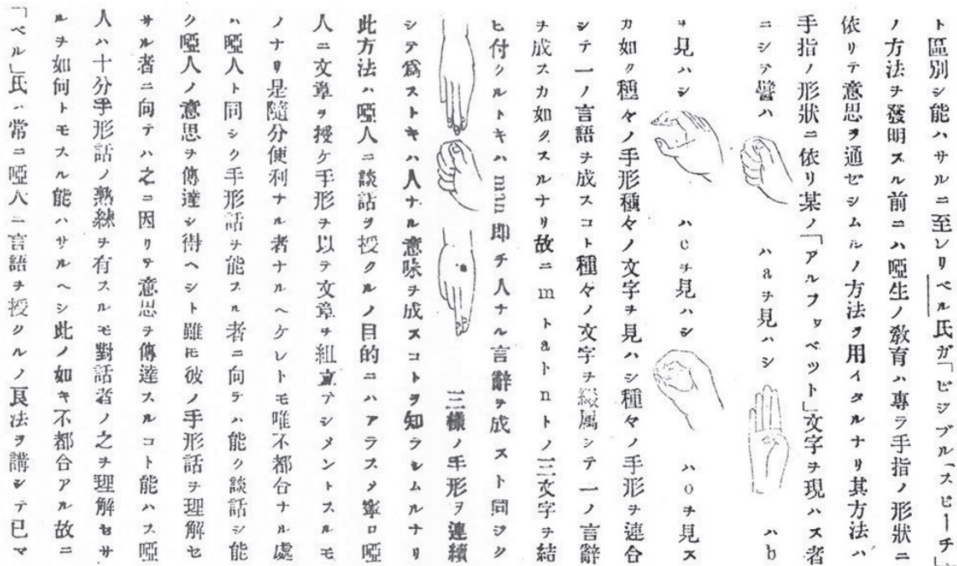


図15 「浦和教育会ニ於テ講述」

『埼玉教育雑誌』11号、埼玉私立教育会、1884年8月。

（1・2頁に渡る部分を抽出し、1つの画像に合成した）

図 15 は伊沢の講演が文字起こしされた記事の冒頭で、「ベル氏」が聾啞者との意思疎通において「手形語」— アルファベットの指文字を使っていることを述べている部分ところである。その例として A、B、C、O の指文字を示したのち、こう説明する。

種々ノ手形種々ノ文字ヲ見ハシ種々ノ手形ヲ連合シテ一ノ言語ヲ成ス
コト種々ノ文字ヲ綴属シテ一ノ言辞ヲ成スカ如クスルナリ

伊沢は 1 字の指文字が 1 字のアルファベットに照応し、これを繋げて言葉にすることができると説明する。この説明について、伊沢は「其〔聴覚障害教育の〕方法ハ手指ノ形状ニ依リ某ノ「アルファベット」文字ヲ現ハス者ニシテ譬ハ」と私はアルファベットを現すもので例えば、と解釈されることを前置きしている。伊沢は壇上に西洋指文字を実演することができたと考えられる。その例として m、a、n の 3 文字の綴りを示すことで "man" の意になることを解説している。

講演の冒頭で「ベル氏ガ「ビシブル、スピーチ」ノ方法ヲ發明スル前ニハ啞生ノ教育ハ専ラ手指ノ形状ニ依リテ意思ヲ通ゼシムルノ方法ヲ用イタルナリ（・・・）」と語るところがある。「ベル氏」が "Visible Speech" を發明する前は啞生の教育として指文字を使っていたということを述べているが、この「ベル氏」とは "Visible Speech" を發明したメルヴィル・ベルのことを指す。伊沢に近しかったグラハム・ベルの父である。この意味で解釈すると、あたかもメルヴィル・ベルが "Visible Speech" を發明する前は指文字を使っていたかのように読めてしまうが、おそらく "Visible Speech" が誕生する前の聴覚障害教育において、指文字が使われてきたという通史的な解説であろう。この箇所は、メルヴィル・ベルの業績と聴覚障害教育の通史が混合されて解説されているため、読解に注意を要する。ちなみに、グラハム・ベルは 1872 年からアメリカ手話を学びはじめたことが伝えられている⁶⁹。伊沢がアメリカに留学していた 1875-1877 年、グラハム・ベルは "Visible Speech" の聴覚障害教育への応用としてアメリカのマサチューセッツ州のクラーク聾学校において口話教育を推進していた。伊沢が講演で示している指文字は一部であるが、彼自身がアメリカに留学していたこと事実からアメリカにおける片手式指文字を参照しているとみてよい。

伊沢は指文字を個別のアルファベットを組み合わせることによって、単語を綴ることができるといい、「手形語」としている。それは「啞人ニ談話ヲ授クルノ目的ニハアラスシテ寧ロ啞人ニ文章ヲ授ケ手形ヲ以テ文章ヲ組立テシメントスルモノナリ」というように、指文字は聾者との意思疎通が可能になるためのものではなく、文章を理解し、記述できるためのものであるという。つまり、会話するものではなく、書記言語を習得させるためであるとしている。このうえで「手形語」は意思疎通する両方が習得しなければならないという欠点を示して話を終え、"Visible Speech" の話題に移っている。指文字を下位において否定的な理路を示すことによ

て、"Visible Speech" の優越性を示していたのである。

さらに重要なのは、「浦和教育会ニ於テ講述」にあるように、伊沢の肉声が文字起こしされるときに、指文字のイラストが文章（書記言語）と分離されて編集されているのではなく、イラストが文章のなかに織り込まれ、伊沢の身振りとして渾然一体になっていることである。つまり、紙面構成は一字ずつ綴るという指文字の意が雑誌の編集者に理解されていたことを証する。この意味において、日本における西洋指文字は聴覚障害教育のなかで浸透しているものであり、かつて斉民が自身のスクラップ・ブックに貼り付けたような珍奇としての指文字という影は消滅しているのである。

ここで、これまで述べてきた指文字の理解を検討しよう。NMに掲載された西洋指文字の記事について謹堂が「指談」と筆記し、加藤はウェブスター辞書の図をもって「指噺」とした。謹堂の「指談」はオランダ語の "VINGER"（指）と "SPRAAK"（話）に対応する直訳であり、加藤は「聾（つんぼ）並ニ啞子（おおし）の為に手の指を以て「エビシ」の字体の形ちを定め彼に噺しをなす助とす」と指でアルファベットを作り、会話の助けになるものであると解説している。よって、ふたりのいう「談」「噺」には人のあいだにおける意思疎通が主眼にある。

一方、明治初期の橋爪は英語をミックスさせた都々逸を残している。それは「Supik, にや云われぬ 手満祢は出来ず 三味のちやうしで さつしやんせ」というものである⁷⁰。Supik は Speak のローマ字読みで、「手満祢」は「手まね」のことである。直訳すれば、「言葉にすることができない、手まねはできない、三味線の調子で察して」という意であろう。また、田中「啞を教ふる説」には「啞と応対するとき互に手間似を以て用を弁する」とあり、明治初期における「手まね」はホームサインも含めた、手を中心にした身振りによる意思疎通という広い概念を有していたと仮定できるだろう。そうでありながら、橋爪の『童蒙手引草』（1873 年）には指文字について「手の指を伸縮させて字形を造らしむ」とあり、「手まね」より狭い概念として認識されている。

幕末・明治初期の英和辞典の視点はどうか。ウェブスター辞書の 1865 年版では、"Dactylology" は "It thus serves in the place of Speech, and is used chiefly among the deaf and dumb. " と話すことの代わりになるもので、主に聾啞者のあいだで使われると解説され、『和訳英辞書』（1869（明治 2）年）には「啞ニ文字ヲ教ユル手真似」、『附音插图 英和字彙』（1873 年）には「手語法（テヤウノシカタ）」とその意が記されており、必ずしも統一された解説があったわけではない。

これらに対し、伊沢にとって指文字は「啞人ニ談話ヲ授クルノ目的ニハアラス」と前置きで謹堂や加藤がいうように意思疎通としてのそれを否定し、「啞人ニ文章ヲ授ケ手形ヲ以テ文章ヲ組立テシメントスルモノナリ」と明瞭に定義づけてみせているのである。"Visible Speech" の優越性を示すためだったとはいえ、これまでの解説よりも精細であり、指文字は聴覚障害教育において書記言語を習得するための手法と位置付けられている。この点において、指文字は聴覚障害教育の領域に到達して

いるのである。

前後するが、国内における指文字の状況として、京都の古河太四郎（1845-1907）による指文字「瘡啞手勢五十音」（1878（明治 11）年）と「啞生五十音字形手勢」（1879（明治 12）年）がある。後者は日本語のカタカナそのものを手の形に転換したものであるが、カタカナに忠実であろうとするあまり、手指を無理に湾曲させなければならなかった。視覚性を重視するために、歪められ、凝固した指の形には、意思疎通というよりは文字を教えるための意図が強調されているように思われる。

このように幕末・明治初期における指文字の理解は、手まねとしての意思疎通に主眼をおいたものから、聴覚障害教育として書記言語を教えるための手法として理解されていく過渡期にあったのではないか。

4. 結 — 幕末・明治初期における指文字の浸透性

本論で取り上げた事項をダイアグラムとして表現しよう（図 16、17）。

図 16、17 のダイアグラムに沿って本論を総括する。

指文字の浸透

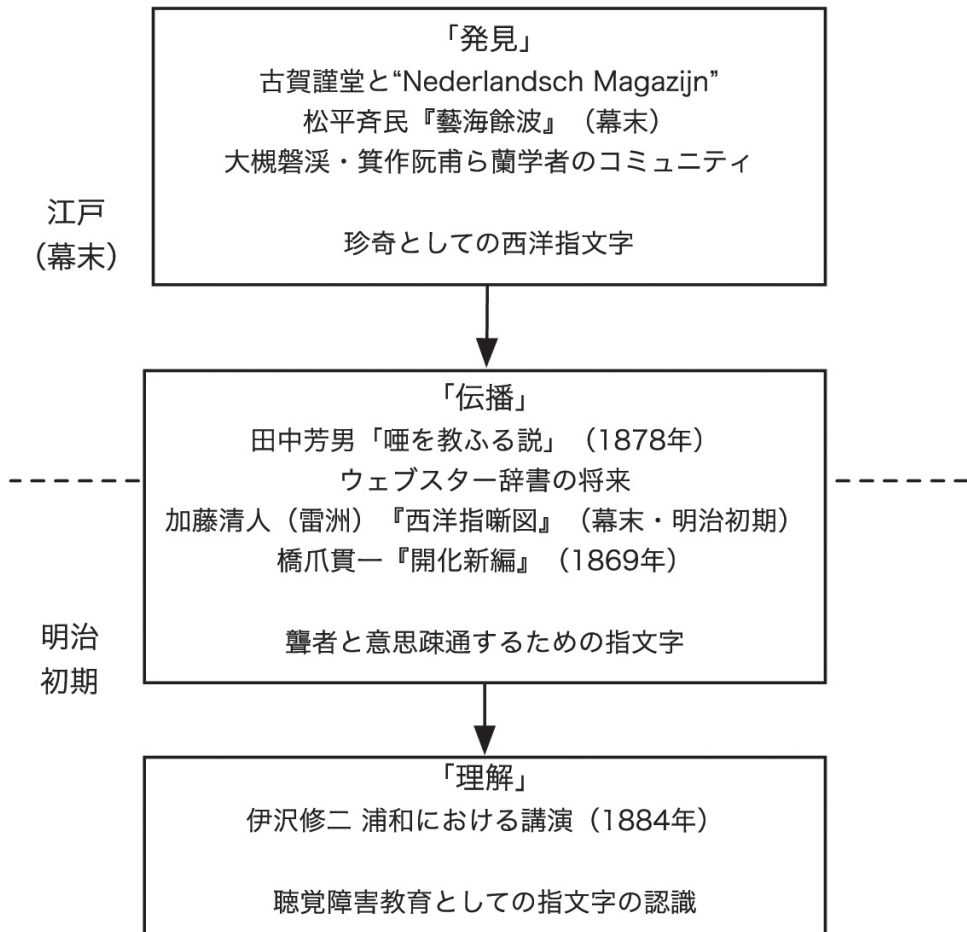


図 16 幕末から明治初期における国内の西洋指文字受容図（筆者作成）

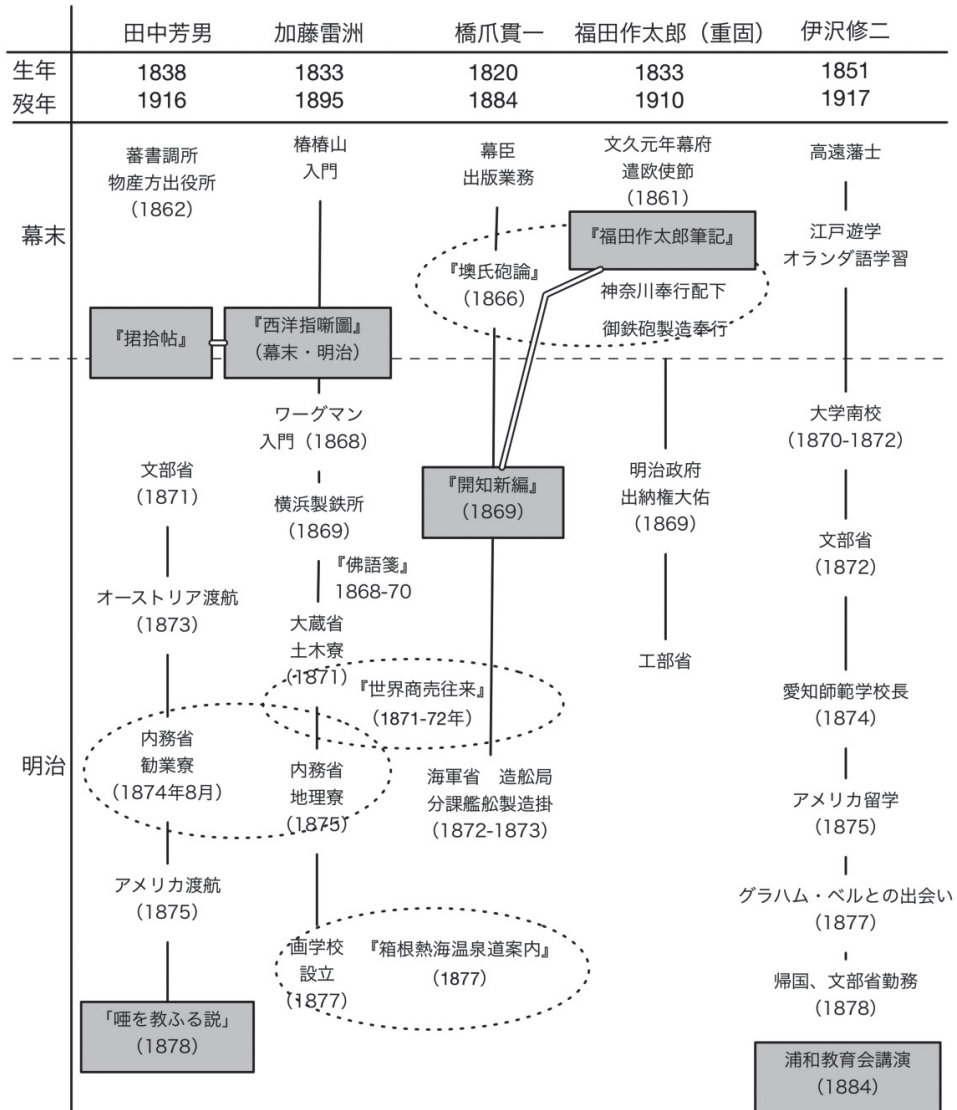


図 17 幕末・明治初期における人間関係図（筆者作成）⁷¹

（編みかけ部分は本論と関係が強い事項を意味し、点線の円は人物のあいだに接点があったことを意味する。）

西洋指文字の「発見」。享保の改革以来、西洋の科学技術に関する情報を吸収するために将来された "Nederlandsch Magazijn" に付随するかたちで西洋の聴覚障害教育の知識が到来した。それはヨーロッパにおける指文字について要約されたものであり、片手式・両手式指文字図が添えられていた。NM の抄訳集である古賀謹堂『度日閑言』と箕作阮甫『玉石志林』において、指文字に関する記述は認められないが、謹堂は宮内庁本の NM の指文字に関する記事の脇に貼り付けた付箋に「指談」と記しており、指文字の概念を理解していた。よって、日本において西洋指文字の存在が初めて確認されたのは謹堂とその周辺においてである可能性がある。

彼らが西洋指文字に関心を持っていたことは、津山藩主・松平斉民のスクラップ・ブック『藝海餘波』において認めることができる。それは NM に掲載された片手式・両手式指文字図から精巧に複写されたものであった。これを提供したのは、蘭学者の宇田川家、箕作家、大槻磐溪の周辺である可能性が高い。この時代において、西洋指文字は日本に浸透するものではなく、身分制社会のもと、蘭学に強い関心を持つコミュニティに留まるものであった。注視したいのは『藝海餘波』において指文字の図のみが貼り付けられていることであり、指文字に付随すべき聴覚障害教育の情報が削除されていることである。このようにヴィジュアル・イメージのみが NM から引き剥がされることと、『藝海餘波』が蘭癖大名の私的コレクションであることから、この西洋指文字の複製は珍奇の対象として斉民の手中に捕らえられたのである。

西洋指文字の「伝播」。西洋指文字に、聾者同士の会話において不可欠なものであるという理解が伝播するのは、日本が開国したあとに英語の知識を吸収するためにウェブスター辞書が大量に将来されたことにあった。その証左として、田中芳男がウェブスター辞書に基づいて指文字を理解していることが『内外教育新報』に掲載された「啞を教ふる説」より判明する。また、田中は加藤雷洲が作成した『西洋指嚙図』を自身のスクラップ・ブック『摺拾帖』に貼り付けている。興味・関心のままに貼り集めるスクラップ・ブックの機能と、「啞を教ふる説」に西洋の指文字について述べるときに「稍巧」と驚きの感情があり、田中は聾者が指文字で意思疎通することを理解しつつも、指文字を珍奇の対象としてみなす残滓もあり、二重の感情があった。

加藤の『西洋指嚙図』は木版で片手式指文字が摺られており、幕末から明治初期に作成されたものである。橋爪貫一の『開知新編』には片手・両手式指文字の両方が掲載されている。指の形態や動きから推定すると、加藤が 1859 年版のウェブスター辞書を参照し、橋爪が 1865 年版を参照している。加藤と橋爪は同じ本の制作に関わるという接点があり、橋爪は『開知新編』を福田作太郎の筆記に典拠していることから、福田ともつながりがあったと考えるほかない。よって、洋学のコミュニティにおいてウェブスター辞書が流布すると同時に、田中、加藤、橋爪、福田によって西洋指文字が日本国内に伝播しているのである。

西洋指文字の「理解」。伊沢修二はアメリカ留学においてグラハム・ベルに出会い、メルヴィル・ベルの発声理論 "Visible Speech" を学んだ経験を有している。伊沢はアメリカの指文字を「手形語」と呼びつつ、それは意思疎通としてではなく、聾啞者に文字を教えるものであると解説していた。講演という場で西洋指文字を実演し、定義づけることで、日本人たちの理解を促しているという点において、これまでの理解と歴然とした違いがある。指文字が聴覚障害教育という俎上にのせられた例である。

伊沢の講演が文字起こしされた記事「浦和教育会ニ於テ講述」の紙面構成（図 15）のように、指文字が書記言語のなかに配置されているところが重要である。書記言語を一字ずつ綴るという指文字の特徴が編集者に理解されているからである。この意味において、日本における指文字は聴覚障害教育という視点で浸透しているのであり、かつて斉民が自身のスクラップ・ブックに貼り付けたような珍奇としての指文字という影は消滅しているのである。

ここまで述べた西洋指文字の「発見」「伝播」「理解」を串刺しにすることで、幕末の日本における西洋指文字の浸透を要約する。まず、幕府の書物流通にかんする規制によって蘭書の知識は蘭学者のコミュニティにおいて独占された。海外の知識を得るために将来された NM に西洋指文字が紛れていたことが蘭学のコミュニティに見出されることで日本において浸透しはじめた。それが日本に留め置かれたのは、西洋指文字の図＝視覚イメージに「珍奇」という欲望が孕んでいたからに他ならない。その欲望は特定の知識層によって独占され、日本における浸透性はきわめて低いものであった。

西洋指文字が浸透していく契機となるのは、既往研究で指摘されたように輸入書による学習や開国による海外使節による西洋の実見という要因のみではない。英語学習の需要によって大量将来されたウェブスター辞書という、多くの項目が集められた百科全書的なメディアに付随する形で西洋指文字が到来することが不可欠であった。これによって西洋指文字が浸透するとともに、珍奇の対象、聾者における意思疎通、聴覚障害教育における書記言語の学習手法と西洋指文字に対するまなざしに変容しているのである。

さて、これまでの手話研究では、近代日本における指文字の全体像と "Nederlandsch Magazijn" とウェブスター辞書の相互関係は検討されてこなかった。本論でこの問題を検討することによって、日本における西洋指文字の認識は少なくとも幕末までに遡上できることを証した。これによって、日本と西洋の指文字の相互関係の評価という問いを新たに提起する起点となるだろう。たとえば、日本における現在の指文字の基礎となるのは、アメリカのギャローデット大学を訪問した大曾根源助が帰国後に構想したとされる「大曾根式指文字」（1931（昭和 6）年）である。この誕生は大曾根がギャローデット大から帰国する 1930（昭和 5）年 3 月以降を待たなければならなかった。しられているように、大曾根式指文字のうち 13 字はアメ

リカの指文字をローマ字として解釈しなおされたものである⁷²。しかしながら、本論で示されたように日本と西洋の指文字の相互関係は大曾根においてはじめて切り結ばれたものではない。ヘボン『和英語林集成』(1867)のように幕末におけるローマ字の理解が国内で進められていった背景を振り返りつつ、「大曾根式指文字」にいたるまでの日本と西洋における指文字の相互関係を再検討する必要がある。くわえて、ウェブスター辞書が編纂された際の図版についてもさらなる史料検討も望まれる。

本論をパラフレーズする。幕末の日本において西洋指文字は珍奇なものとして発見され、明治にかけてウェブスター辞書の指文字図に基づいて、聾啞者との意思疎通として指文字の知識の伝播があった。また、明治初期は留学生たちによってアメリカの教育状況が包摂されていく過程があった。明治10年代以降の盲啞教育が開始された時期には、西洋指文字の概念を理解したアメリカ留学経験者によって聴覚障害教育における指文字の概念が説かれることによって、国内において西洋指文字が理解されていった。

かくして、西洋指文字は日本に浸透するのである。

謝辞

本研究における調査・分析において、以下の研究助成を受けた。

公益財団法人 トヨタ財団 個人研究助成(平成26年度)

一般財団法人 財団せせらぎ 研究助成(平成28年度)

注

¹ 『鎖国論』は1801年に訳出、1850年に出版されている。

日本における「鎖国」概念の発生と受容の歴史については以下参照。

大島明秀(2009)．『「鎖国」という言説－ケンペル著・志筑忠雄訳『鎖国論』の受容史』．京都：ミネルヴァ書房．

² ロナウド・トビ(2008)．『「鎖国」という外交』．東京：小学館．

³ 蕃書調所の成立に関する研究は数多いが、以下の研究が優れている。

原平三(1943)．「蕃書調所の科學及び技術部門に就て」、『帝國學士院紀事』，2(3)：437-471．

二見剛史(1979)．「蕃書調所の成立事情」、『日本大学精神文化研究所・教育制度研究所紀要』10：15-56

⁴ 『市中取締続類集 書籍之部 四ノ中』国会図書館デジタルライブラリー．
<http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2588674/63> (2017年5月10日確認)

⁵ Lente(1993)．"De wording van een moderne samenleving 1800-1890. Deel II". *Geschiedenis van de techniek in Nederland*.

⁶ 伊東剛史(2005)．「チャールズ・ナイトと『ペニーマガジン』：十九世紀前半

英国の出版文化」,『史学』74(1/2), 131-159.

⁷ Schneider(2002). "The Penny Magazines: An Early Intercultural Experience in Europe", IAMCR conference 2002, Barcelona, Spain.

http://www.portalcomunicacion.com/bcn2002/n_eng/programme/prog_ind/asp4.asp?id_pre=1101 (2017 年 5 月 10 日確認)

⁸ これらの指文字の歴史についての日本語文献として、神田『指文字の研究』(1986)がある。同書には西欧、アジアを含めた世界各国の指文字について多くの図版を掲載しているが、掲載元を明示していない。また、本論で取り上げている NM の指文字図については言及していない。『指文字の研究』については総合的な再点検が不可欠であろう。

神田和幸 (1986).『指文字の研究』. 東京: 光生館.

⁹ Arnault etc. (1822). "Biographie nouvelle des contemporains ou Dictionnaire historique et raisonné de tous les hommes qui, depuis la Révolution française, ont acquis de la célébrité par leurs actions, leurs écrits, leurs erreurs ou leurs crimes, soit en France, soit dans les pays étrangers. T.6", Librairie historique, Paris.

365-373.

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k411274v/>

Charton (1833) "Le Magasin pittoresque" Paris. 299-300.

<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k314169/>

¹⁰ オランダ船が持参した西洋書籍の一覧である「持渡書籍銘書」に基づいて表を作成した (佐賀県武雄市教育委員会蔵。天保十年、弘化二年、四年、嘉永元年から安政六年)。

¹¹ 古賀家三代については眞壁仁の研究に詳しい。

眞壁仁(2007).『徳川後期の学問と政治: 昌平坂学問所儒者と幕末外交変容』. 名古屋: 名古屋大学出版会.

¹² 「古賀家古文書」慶應義塾大学貴重書室蔵 (請求記号 26X@9@1)

¹³ 市川兼恭 (1897). 「経歴談」, 『名家談叢』 26:36-44.

¹⁴ 眞壁をはじめとするこれまでの古賀研究においては『度日閑言』が 25 冊であるとするが、慶應義塾大学図書館が 26 冊目を所蔵するため、誤りである。

慶應義塾大学本は 1 冊で縦 268mm、横 181mm である。国会図書館本と異なり、表装が茶色で題籤には「度日閑言」とあるのみで巻を示す漢数字がつけられていない。しかし、内題に「度日閑言 卷廿六 茶溪 古賀増 撰」とあり、その前に目次がつけられていることは国会図書館本と共通する。

これは全体で五十丁あり、十行の縦書きに訳文を掲載したのち、丸括弧で引用先を明記し、付言がつけられる。引用先はほとんどが NM である。また、朱で読点を打ち、

青で強調をしている。これらは国会図書館本と合致しており、謹堂の手になるものとしてさしつかえない。

目次のみを抜書すると以下のとおりである。

「書庫 自在女神 古酒 劔魚力 客寓 英甲必舟 骨化 巴勒血婚 気船記 奢侈禁 駢駢人 メッツ府 富番 青魚 飲食戒 一時間夢 淡泊 三乳 羊獏 ニコチ子毒」

¹⁵ 和訳を行っていることについては、宮内庁書陵部図書寮において、NM を翻訳したと思われる断片である『和蘭宝函（抄訳）』（200・85、古賀本）より

¹⁶ 「故古賀精里、侗庵、茶溪三世著書目録」『明治廿二年 図書録』宮内公文書館蔵 この目録には外国語文献が「西籍部」の項目に収録されており、「荷蘭寶函 ゴーデリック氏兄弟 千八百三十四至五十六年 二十三本」と NM が古賀家の所蔵になることが認められる。

¹⁷ 『謹堂日誌鈔之一』，慶應義塾大学附属図書館斯道文庫蔵（請求記号 ハ09/4/69/1）

左肩に直接「謹堂日誌鈔之一」と墨書されている。冒頭に「濱野文庫」「麻生文庫」の印記があり、浜野知三郎（1879-1941）、麻生太賀吉（1911-1980）の旧蔵になるものである。

内容は嘉永元年から安政三年までの日記の抄録で、赤い罫紙に謹堂の読書や儒学・蘭学・洋学者との交流に関する情報が書かれている。ただし、謹堂のことを「謹堂先生」とする箇所があり、人名の誤記もあることから原本にたいして第三者による加筆や誤記が伺われ、事項の取り扱いには注意が必要であろう。

日記の本文でいう「才八」は後の池田洞雲のことをさす。佐賀藩士・納富又次郎の実子で、五郎川勘兵衛の弟・武雄大夫の家臣となり、藩命によって伊東玄朴の弟・池田玄瑞の養子となった。安政二年歿（伊東榮『伊東玄朴傳』1916年、32頁）。『牛痘法篇』『鉄煩全書』の訳者として「池田才八」名義で名を連ねていることから、オランダ語と科学技術の教養を有していた人物である。

なお、謹堂の日記の原本は慶應義塾大学図書館が所蔵する（請求記号 176/30/1）。これは最晩年の明治17年1月1日から10月28日までの日録1冊が漢文で記されたものである（謹堂は10月31日に逝去する）。日記では朱で読点を打ち、強調するための傍線を青でひいている。この朱と青の使い分けは、NM と『度日閑言』への書き込みと共通性が認められることに注意しておきたい。つまり、謹堂は『度日閑言』と日記で同じ書き方をしているのである。

¹⁸ 『調所教授方記目』（早稲田大学図書館蔵（請求記号 イ02 05250））。この内題には「志林底稿目」とあり、『月刊志林』（未刊）を想定した翻訳事業であろう。

¹⁹ 朝倉治彦（1955）．「玉石志林について」，『国史学』65:61-72.

²⁰ 盲人の記事を採録していることについては、謹堂の日記を採録した『謹堂日誌

鈔之一』安政3年1月19日の条に注意したい。この条には「筑革二氏目ヲ糊セラレ
譬ニ均シ可慙」とあり、幕臣の川路聖謨と水野忠徳が眼病によって盲のようになった
ことが書かれている。謹堂の盲人への憐れみの視線が露出した瞬間であろう。

²¹ 岡村千曳(1953)、『紅毛文化史話』東京：創元社。

²² 岡村(1953)。

野村正雄(2009)。「津山藩主松平斉民と大槻磐溪各々の貼込帖に載る西洋の版画
数枚の委細解明と二人の交流」、『一滴：洋学研究誌』17:39-51.

²³ 「日記 御小納戸方」弘化2年4月～12月、津山郷土博物館蔵(史料番号
E5-1-91)。なお、□は破損などで判読できない部分である。

²⁴ 早稲田大学中央図書館蔵(請求記号 文庫 08 C0071)

表題の「瑪鷲摂應」は「マガゼイン」と読み、NMのことを指す。年を安政元年と
しているのは、『勤書』(早稲田大学図書館蔵、二巻目、(請求記号 文庫 08 C0081 2))
の安政2年12月8日の条、天文台への伺より推定している。

²⁵ 呉秀三(1914)、『箕作阮甫』。東京：大日本図書。

²⁶ 金井圓(1986)。「東京大学史料編纂所蔵箕作家旧蔵蘭書考」『日蘭交渉史の
研究』、京都：思文閣出版、272-288.

²⁷ 勝盛典子(2011)、『近世異国趣味美術の史的研究』。京都：臨川書店。

「第1章 木村兼葭堂と船載蘭書」を参照せよ。

²⁸ 金子一夫(1992)、『近代日本美術教育の研究 明治時代』、東京：中央公論美
術出版、71-83.

²⁹ 田中圭一編注(1996)「安政三年 江戸日記」『柴田収蔵日記2』、東京：平凡社、
291-339.

³⁰ 田中(1996)、311.

「・」の部分では田中が翻刻できなかったか、文書に破損などがあるために解読できな
かったことを意味すると思われる。

³¹ 成田美紀子(1971)「柴田収蔵について」『柴田収蔵日記 下巻』、新潟：小木町
史刊行会(非売品)、372.

成田は柴田への申渡を全文引用しており、「右蕃書調所絵図調書役可被申渡候(後略)」
と記されている。柴田の日記には同日に「掌図」に任命されているとあるが絵図調と
同義であろうか。今後の検討材料であろう(田中(1996)、333-334)。

³² 福沢諭吉(1899)、『福翁自伝』。東京：時事新報社。

³³ 『内外教育新報』の文献学研究については以下参照。

大間敏行(2009)、『内外教育新報』にみる初期教育雑誌の一樣態 — 沿革・発行部数・
流通実態に焦点をあてて』『教育学論集』、5:23-46.

³⁴ ロリンズ(1983)、『ウェブスター辞書の思想』。東京：東海大学出版会、218.

³⁵ 早川勇(2004)『ウェブスター辞書の系譜』。東京：辞游社、3-4.

³⁶ ウェブスター辞書の系列として "A dictionary of the English language" がある。早川 (2004) によれば、傍系辞書として位置付けられる。このうち、1867 年版中辞典を調査したが、指文字の図版を見出すことはできなかった。

³⁷ Webster (1859) . "An American dictionary of the English language" Springfield : George and Charles Merriam. lxxxii.

³⁸ The American Asylum (1843) "The twenty seventh report of the directors of the American Asylum, at Hartford, for the Education and Instruction of the Deaf and Dumb Exhibited to the Asylum, May 13th 1843.", HARTFORD:Case, Tiffany & Burnham, Printers.

<https://archive.org/stream/annualreportamer2137amer#page/n239/mode/2up> (2017 年 5 月 10 日閲覧)

ただし、この年報とウェブスター辞書における指文字図は X の表現のみ、手の向きが異なっているため図が完全に一致しているわけではない。

³⁹ Kennedy(2015) . "Abbé Sicard's Deaf Education Empowering the Mute, 1785–1820", Palgrave and Macmillan, 114-119.

⁴⁰ Leavitt (1947) . "Noah's ark New England Yankees and the Endless quest", 69. Springfield: G. & Merriam Company.

早川勇「内閣文庫などのウェブスター系辞書」『辞書編纂のダイナミズム』東京：辞游社，382-421.

⁴¹ 大日本山林会 編 (1913) .『田中芳男君七六展覧会記念誌』. 東京:大日本山林会，89.

⁴² 「画学開業之件」『私学開業願』(608.A3.22) 東京都公文書館蔵

⁴³ 伊豆山敦子 (1990) .「加藤雷洲と「仏語箋」-- 近代絵画と辞書の出会い」『獨協大学教養諸学研究』25: 104-125.

⁴⁴ 墓碑史蹟研究発行所 (1935) .「故藝苑諸名家碑」『墓碑史蹟研究 7』, 890.

⁴⁵ 横須賀海軍工廠 編 (1915) .『横須賀海軍船廠史』第 1 巻, 99.

「鑄鑿」は工具としてのヤスリとノミを意味し、「頭目」からウェットは工具の製造・使用の指導層にあたる人物と想定される。

⁴⁶ 横須賀海軍工廠 編 (1915) , 157, 171.

⁴⁷ 国立公文書館、国立国会図書館が所蔵する資料より推定した。

『職員録・明治四年十二月・諸官省官員録 (袖珍) 改』

『職員録・明治六年一月・袖珍官員録改』

西村組出版組 (1875) .『掌中官員録 明治八年』東京：西村組出版組.

⁴⁸ ユネスコ東アジア文化研究センター編 (1975)『資料 御雇外国人』東京:小学館，366-367.

⁴⁹ 伊豆山 (1990) .

伊豆山が引用するマクヴィーンについては、ユネスコ東アジア文化研究センター編 (1975) , 423.

⁵⁰ 田口雅子 編著 (2016) .『佛語箋 研究・索引・影印』鎌倉：港の人.
田口によれば、加藤はオランダ語も理解していたことが指摘されている。

⁵¹ 鈴木光次郎 編 (1892)『明治閨秀美譚』東京：東京堂, 98.

⁵² 『日本教育史資料』〔7〕文部省 編の 670-673 頁には開成所の人名録 (元治二年、慶應二年) が掲載されているが、加藤の名は確認できなかったため、勤務実態は不明である。

⁵³ 内田洸 (2013) .「洋風画家安田雷洲の画業再考・住居・作品の原図・蘭学ネットワークと海防思想をめぐって」,『美術史』63(1):68-84.

内田洸 (2014) .「安田雷洲の没年及び画業について」,『美術史研究』52:43-64.

⁵⁴ 内田 (2013) .

⁵⁵ 「田中芳男履歴書」『叙位裁可書・明治三十年・叙位卷十』国立公文書館蔵

⁵⁶ 『鎮台府一件 二』396 丁. (東京都公文書館蔵 請求番号 605.A5.07) この史料は全四巻で構成される。『鎮台府一件 四』(請求番号 605.A5.09) には、明治元年六月における新聞誌の類絶板調があり、「内外新報」の項目に橋爪の名前があり、肩書きは「編集並蔵板元」とある。

宮武外骨・西田長寿 (1985) .『明治新聞雑誌関係者略伝』(明治大正言論資料 ;20, 東京：みすず書房.) には橋爪の項目があり、栗本鋤雲 (1822-1897) とともに昌平黌教授であった儒学者・安積艮斎 (1791-1860) のもとに就学すると書かれている。

⁵⁷ 松壽軒編輯 (明治初期) .『English Ballad patent 英語都々ー』東京、愚物社.
早稲田大学図書館蔵 (請求記号 文庫 08 C0778) .

⁵⁸ 「戊 2 号大日記 兵部省達 橋爪貫一 13 等出仕申付の件」『公文類纂 明治 5 年 卷 5 本省公文 黜陟部 1』(請求番号：海軍省・公文類纂・M5-5-77 (所蔵館：防衛省防衛研究所))

「甲 3 套送達大日記 主船寮へ達 橋爪貫一外 1 名免職の件」『公文類纂 明治 6 年 卷 4 本省公文 黜陟部 1』(請求番号：海軍省・公文類纂・M6-4-126 (所蔵館：防衛省防衛研究所))

⁵⁹ 橋爪貫一抄訳 (1873)『童蒙手引草 二編下』誠之堂.

歩行がままならないことについては、1872 年の海軍省の文書より足痛のために在宅で造船書の調査に関する業務を行っていることより判明する。

「戊 5 号大日記 造船局申出 出仕杉浦金外 1 名百日以上病氣不参」『公文類纂 明治 5 年 卷 45 本省公文 医療部』(請求番号：海軍省・公文類纂・M5-45-117 (所蔵館：防衛省防衛研究所))

⁶⁰ 橋爪貫一抄訳 (1873) .『童蒙手引草 二編上』誠之堂, 22 ウ・23 オ.

橋爪貫一 編 (1875) .『万国地誌略字引 卷之一』東京：雁金屋清吉, 自序.

雁金屋清吉は本名を青山清吉といい、東京・小石川で活動していた書肆である。詳しくは以下参照。

反町茂雄（1984）．『蒐書家・業界・業界人』東京・八木書店，25-26.

⁶¹ 松沢弘陽（1993）．『近代日本の形成と西洋経験』東京：岩波書店，227-228.

⁶² 中野善達・加藤康昭（1991）．『わが国特殊教育の成立』，東京・東峰書房，158.

なお、『福田作太郎筆記』は東京大学史料編纂所蔵。全 27 冊で題簽に『福田作太郎筆記』と記されている。

⁶³ 樋口雄彦（2006）．『幕臣福田重固・高島茂徳兄弟』福田達，18-23.

⁶⁴ 樋口（2006）54.

⁶⁵ "Dactylology" の項目にある本文は以下の通り。また、"Deaf-mute" の項目には "Dactylology" の図を見よ、という指示がある。

A method of communication which employs what is called a manual alphabet, or finger alphabet, that is, certain positions and motions of the hand and fingers answering to the common written alphabet. It thus serves in the place of Speech, and is used chiefly among the deaf and dumb.

There are two different manual alphabets, the one-hand alphabet, which was perfected by the Abbé de l'Epée, who died in 1789, and which is used in France and America. and the two-hand alphabet, almost as ancient, used in England and Germany.

⁶⁶ イメージにおける時間の表現については、美術史において重要なテーマであり、とりわけ「絵画と時間の関係性」という文脈で論じられている。これについては、レッシング『ラオコオン 絵画と文学の限界について』斎藤栄治訳，1970 年，岩波書店．をみよ。

⁶⁷ 橋本美保（1998）．『明治前期におけるアメリカ教育情報受容の研究』東京：風間書房．

⁶⁸ Visible Speech と視話法を同一と解釈する研究は例えば以下がある。

川本宇之介（1941）『聾教育学精説』（改訂版），東京：信楽会，206.

上沼八郎（1962）『伊沢修二』，東京：吉川弘文館，293.

呉宏明（2004）「伊沢修二と視話法 _ 楽石社の吃音矯正事業を中心に」『京都精華大学紀要』26:146-147.

渡辺克典（2004）「吃音矯正の歴史社会学 — 明治・大正期における伊沢修二の言語矯正をめぐる一」『年報社会学論集』17: 34.

⁶⁹ ロバート・V・ブルース（1991）．『孤独の克服 — グラハム・ベルの生涯』東京：NTT 出版，85-86.

⁷⁰ 松壽軒編輯（明治初期），七オ．

⁷¹ 各人物の経歴について、加藤と橋爪の経歴については本論における調査に基づき、田中、福田、伊沢の経歴については以下を参照して作成している。

上沼（1962）．

飯田市美術館（1999）．『日本の博物館の父 田中芳男展』長野：飯田市美術館．

樋口（2006）．

⁷² A（ア）, I（イ）, U（ウ）, E（エ）, O（オ）, S（サ）, N（ナ）, H（ハ）, M（マ）, Y（ヤ）, R（ラ）, W（ワ）, X（ヌ）の13字を指す。

－ 2017 年 8 月 18 日受理－

木下知威「指文字の浸透」
『手話学研究』日本手話学会、26、2017

正誤表

以下のように修正をお願いいたします。

53 頁 18 段目

誤：アメリカと和親条約の締結した

正：アメリカと和親条約を締結した

57 頁

図 3 と図 4 に提示されている図を入れ替えてください。

76 頁 14-15 段目

誤：開成所は、蕃書調所は 1862（文久 2）年に洋書調所となり、1863（文久 3）年に開成所となっている。

正：開成所は、~~蕃書調所は 1862（文久 2）年に洋書調所となり、1863（文久 3）年に開成所となっている。~~

78 頁 12 段目

誤：摸（サダ）

正：摸（サグ）

78 頁 17 段目

誤：橋爪自身は海外渡航の経験を持たずありながら、

正：橋爪自身は海外渡航の経験を持たずにありながら、